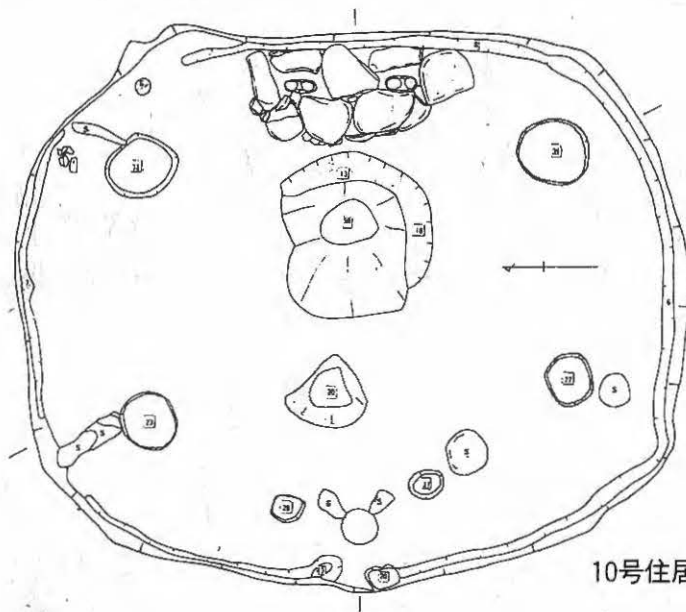


長野県木曾郡 お玉の森遺跡 (第9次調査)

—— のむら木材株式会社用地造成事業に伴う発掘調査報告書 ——

縄文時代中期後半住居址群



10号住居址

1998・3

のむら木材株式会社
日義村教育委員会
木曾郡町村会

は　じ　め　に

上松町に有ります、のむら木材株式会社が現地に計画しておりました資材倉庫（後にドライブインに変更）が着工のされるとの連絡が有り、急きょ関係機関と協議を行い記録保存のための発掘調査を実施することと成りました。

遺跡そのものは、本来現状保存が最善とされておりますが、今回の場合は、止むを得ず発掘調査をし、記録保存をしなければならない状況にあります。その結果、発掘調査を木曾郡町村会に委託し、調査員として神村 透先生並びに百瀬忠幸氏、松原和也氏にお願いすることにしました。又、作業には、近くの住民の皆さん方をお願いしました。

今回調査の対象となったお玉の森遺跡は、過去7回に亘って調査されておりますが何れも開発に伴うものであり、いささか自戒の念が無い訳ではありませんが、これも致し方無いものと考えます。

さて、今回の発掘では、縄文時代中期後半の竪穴式住居址が9軒、土壙1ヶ所が検出されました。又、遺物としては完形土器2個、特に釣手土器の発見は、特筆に値するものと考えられます。

以上のような結果で調査を終了しましたが、本調査にご協力をいただいた関係者の皆様方、調査報告書の執筆をしていただきました、神村透先生には、心より厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

日義村教育委員会教育長　長谷川 悦 夫

例 言

1. 本報告書は、木曾郡上松町のむら木材株式会社が、新規事業を計画し日義村に土地を求めた。その事業地内の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県教育委員会文化課の指導で、日義村教育委員会がのむら木材株式会社から委託を受けて行なった。
3. 日義村教育委員会は、木曾郡埋蔵文化財調査実施要綱により、木曾郡町村会と技術指導委託協定書を結び、発掘調査・整理作業、そして報告書執筆を委託した。
4. 発掘調査は木曾郡町村会埋蔵文化財係百瀬忠幸、松原和也、神村透があたり、平成8年10月に行なった。
5. 報告書執筆は神村透が担当した。
6. 出土遺物は日義村教育委員会が保管し、遺構図面、写真等は木曾郡町村会埋蔵文化財調査作業所（上松町上ヶ畑）で保管している。

目 次

はじめに

例 言

I. 遺跡の位置	1
II. 発掘調査	3
III. 遺構	4
IV. 遺物	9
V. 調査にかかわって考えた事	13

挿 図 目 次

第1図 日義村の主な遺跡分布図	22	第22図 8号住居址出土土器	43
第2図 遺跡附近地図	23	第23図 8・9号住居址出土土器	44
第3図 用地内住居址位置図	24	第24図 9・10号住居址出土土器	45
第4図 5号住居址	25	第25図 10・11号住居址出土土器	46
第5図 6号住居址	26	第26図 11・12・13号住居址出土土器	47
第6図 7号住居址	27	第27図 5・6号住居址出土石器	48
第7図 8号住居址	28	第28図 6・7号住居址出土石器	49
第8図 9号住居址	29	第29図 7号住居址出土石器	50
第9図 10号住居址	30	第30図 7・8号住居址出土石器	51
第10図 11号住居址・13号住居址	31	第31図 8・9・10・13号住居址出土石器	52
第11図 12号住居址	32	第32図 5号住居址出土台石他	53
第12図 土 壙	33	第33図 6・7・8・9・10号住居址出土台石他	54
第13図 各住居址出土土器実測図	34	第34図 10号住居址出土石棒他	55
第14図 12号住居址出土吊手土器	35	第35図 11・12号住居址出土台石他	56
第15図 5号住居址出土土器	36	第36図 12・13号住居址、土壙出土台石他	57
第16図 5・6号住居址出土土器	37	第37図 住居址の規格性	58
第17図 7号住居址出土土器	38	第38図 10号住居址関連遺構	59
第18図 7号住居址出土土器	39	第39図 お玉の森遺跡住居址関連遺構	60
第19図 7号住居址出土土偶	40	第40図 吊手土器関連図	61
第20図 8号住居址出土土器	41	第41図 住居址セット関係図	62
第21図 8号住居址出土土器	42	第42図 以前検出住居址	63

図版目次

第1図版	お玉の森遺跡遠望	65	第14図版	11号住居址	78
第2図版	お玉の森遺跡遠望	66	第15図版	12号住居址	79
第3図版	5号住居址	67	第16図版	12号住居址	80
第4図版	5号住居址	68	第17図版	13号住居址	81
第5図版	6号住居址	69	第18図版	土 壙	82
第6図版	7号住居址	70	第19図版	5・7号住居址出土土器	83
第7図版	8号住居址	71	第20図版	8・9号住居址出土土器	84
第8図版	9号住居址	72	第21図版	10・11・12号住居址出土土器	85
第9図版	10号住居址	73	第22図版	12号住居址出土吊手土器	86
第10図版	10号住居址	74	第23図版	調査スナップ	87
第11図版	10号住居址	75	第24図版	調査団	88
第12図版	10号住居址	76	第25図版	冬をこした住居址	89
第13図版	10号住居址	77	第26図版	一年後の住居址	90

表目次

第1表	村内主要遺跡一覧表	2
-----	-----------	---

I 遺跡の位置

お玉の森遺跡は、長野県木曽郡日義村宮の越にある（第1図7）。

日義村は木曽川最上流部にあって、水源地木祖村が北にあり、南は木曽福島町に挟まれた、中央アルプス木曽駒ヶ岳（2,956m）を頂点として、木曽川を底辺とする三角形の村である。生活舞台は支流にある山間部（神谷・砂ヶ瀬・野上）、段丘部（宮の越・原野）高原部（渡沢・元原・小沢）に区分できる。お玉の森遺跡は段丘部の中央部にある。

木曽川の両岸に段丘地形はみられるが、左岸は南北に長く続いている。その中間に比較的に大きな支流尻平沢川（しっぺいざわがわ）が西流して、段丘を切って木曽川に合流している。この川の押しだしによって木曽川は西へおされて、段丘面はこのあたりが一番巾広くなり、段丘崖下に木曽としては広い沖積平坦地をつくっている。（第2図）

遺跡附近の段丘面は巾約400m、山麓部で標高900m、段丘端で870mと西へ傾斜する尻平沢川扇状地がのっている。木曽川との比高30m、調査地点から木曽川への距離は約700mある。尻平沢川を挟んで南側がお玉の森遺跡で、北側が上の原（えのばら）遺跡である。お玉の森遺跡は水道工事、学校施設、除雪センターなどの工事に伴い緊急発掘調査が行なわれており、今回で第9次調査となる。これまでに縄文時代住居跡4軒、平安時代住居跡30軒を調査している。これらの調査によって、縄文時代住居は国道を挟んで尻平沢川にそって山よりにあり、平安時代住居は国道から日義小中学校に分布していることがわかっている。

今回の調査地は国道より山よりにあって、昭和49年の水道貯水槽に伴う調査で、縄文時代3号住居址を調査しているのので、住居址の存在が予想された。この場所は以前は畑地であったが、戦後しばらくして落葉松が植樹されて山林となっていた。山林の南部は水田が2枚あって貯水用の堤と続いている。北西は国道19号、北東は林道があって崖で尻平沢川へ落ちている。東南は少し間をおいて山地となっている。

村内には50近い遺跡がある。主な遺跡をあげると（第1図、第1表）、下の畑遺跡は野上川の上流にあって、縄文時代早期から晩期までの遺跡があり、屋敷ヶ原一帯を狩りや採集の場とするキャンプ地と思われる。小沢原遺跡では弥生時代前期遠賀川系土器壺と条痕文土器甕が出土している。宮の原遺跡では中世の遺構と遺物が調査で検出されている。芝垣外遺跡は縄文時代後・晩期の遺物が出土し、調査で抜歯人骨が検出された。巾遺跡では平安時代八稜鏡が出土している。上の原遺跡では縄文時代前期、中期の住居址、平安時代住居址が調査され、住居址内に小鍛冶遺構を検出している。マツバリ遺跡では縄文時代中期、後期、弥生時代中期、平安時代の住居址、縄文時代後期集石墓が調査され、木曽郡北部の拠点集落として注目されている。八幡社遺跡ではJR東海原野駅をつくる時に多量の土器が出土したという。接する下町では旧石器時代のエンド

スクレーパーが採集されている。高見遺跡は縄文時代前期末の土器が出土している。野々尻遺跡はJ R東海の複線化工事の時に調査され、縄文時代前期から後期の遺物が出土している。元原遺跡では15C初の屋敷跡が出土し、中世陶磁器が多く出土している。小沢遺跡では縄文時代中期の土器が出土している。稲荷沢遺跡では縄文時代草創期表裏縄文土器や早期押型文土器が出土し、集石炉も確認されている。二本木遺跡では縄文時代草創期微隆起線文土器、早期押型文土器、中期竪穴住居址、平安時代住居址が調査で検出されている。巴松遺跡では弥生時代後期の住居址を調査している。地図にはおとしていないが新地からゴルフ場一帯の木曾駒高原には遺跡の分布が多く、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物が採集されている。

第1表 村内主要遺跡一覧表 (番号は第1図と同じ)

番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生			平安	中世	その他		
			草	早	前	中	後	晩	前	中	後					
1	下の畑			○	○	○	○	○								
2	小沢原					○				○				○	遠賀川式土器	
3	宮の原					○	○						○	○	中世遺構を調査	
4	芝垣外						○	○						○	晩期墓調査 抜歯人骨	
5	巾					○								○	八稜鏡	
6	上の原				○	○								○	縄文・平安住居址 を調査	
7	お玉の森			○	○	○	○	○						○	○	縄文・平安住居址 を調査
8	マツバリ			○		○	○	○		○				○	○	縄文・平安住居址 を調査
9	八幡社	○				○										
10	高見				○											
11	野々尻				○	○	○									
12	元原					○								○	中世屋敷跡を調査	
13	小沢					○										
14	稲荷沢		○	○											集石炉を調査	
15	二本木		○	○		○								○	縄文・平安住居址 を調査	
16	巴松			○											○	弥生住居跡を調査

Ⅱ 発 掘 調 査

1. 調査に至るまでの経過

平成8年9月、上松町のむら木材株式会社・野村弘は国道19号に接した所有地の土地造成について日義村役場を訪ねたおり、同用地がお玉の森遺跡内にあつて、埋蔵文化財包蔵地として調査が必要であると助言された。早速に日義村教育委員会と相談し、文化財保護法に基づき、法57条の2の埋蔵文化財発掘届を出すと共に、17日、日義村教育委員会・のむら木材株式会社・木曽郡町村会とで現地協議し、試掘し遺構確認したら、日義村教育委員会が発掘調査を受託することを決める。21日、重機を入れてトレンチ掘りをして竪穴住居址を確認する。日義村教育委員会は法98条の2による発掘調査通知を出し、木曽郡町村会と発掘調査指導及び技術指導の委託協議をし、委託協定書を結ぶ。この結果、木曽郡町村会が発掘調査及び整理を行ない、調査にかかわる事務を日義村教育委員会が行なうことになって、10月1日より発掘調査を実施した。

2. 発掘調査及び整理作業

発掘委託者：のむら木材株式会社 野村 弘

発掘主体者：日義村教育委員会 教育長 今井元秀（9月まで） 長谷川悦夫（10月から）

事務局 倉本市雄 野口英樹 川上清人

発掘担当者：木曽郡町村会 事務局 局長 上原左近 係 田沢文章 尾崎恵子

文化財係 百瀬忠幸 松原和也 神村 透

発掘作業：齊藤寿子 上条兼治 上条あさ江 松原政毅 松原喜久子 中村ふき子

内海 明 越取今朝雄 上村由美子 久保寺すみ子 大戸美恵子 徳原とら子

整理作業：上村由美子 久保寺すみ子 大戸美恵子 徳原とら子

調査協力：安藤建設株式会社（重機） 株式会社パスコ（土器写真撮影）

発掘調査は、調査日程、調査費用のこともあつて日程的にきびしい条件であつた。その上に遺跡地は山林で落葉松を伐採放置したままであつた。まず倒木を片付け、重機でトレンチを掘り住居址を確認し、その部分の表土を除去して調査する方法をとつた。10月1日から調査に入り、とにかく住居址を調査することにして、9軒の竪穴住居址と土城1基を16日間で検出し、29日に調査を終了した。出土遺物は上松町の木曽郡町村会埋蔵文化財調査整理作業所に運び、水洗・記入・接合・拓本・実測などの整理作業と、図面の整理・トレースもした。

平成9年度になって、図版作成および報告書執筆を作業所で神村が行つた。

Ⅲ 遺 構

今回の調査で縄文時代中期後半住居址9と土壙1を検出した。当遺跡では今までの8回の調査で縄文時代住居址と平安時代の住居址を検出しており、前者をJ、後者をHと略号し発見順に1・2・3……と番号をつけ、縄文時代住居址は今までに4軒検出(第42図)されているので、今回はJ5～J13と番号をつけ、遺物にはH0J4というように記号した。本報告書ではJを省略する。

5号住居址新、旧(第4図、図版3、4)

用地内西隅にあって、水田造成で埋められており、その下に木炭混じりの黒土があって確認された。住居址中央部を東から西へ流れる巾1mの流水路跡があるのと、後で確認できたのであったが、旧住居址内に新住居址がつくられていてと複雑であったため新住居址のプランを確認できなかった。水路跡からは平安時代灰釉陶器が出土し、平安時代の用水路である。現在の水路は北西6mの所にある。掘りさげたら石囲い炉が検出されたが、貼り床も堅い床面も検出されず、少し掘りさげたらもう一つ石囲い炉が検出され、ローム床面もあって新旧2軒の住居址が重なっていたのを知った。

新住居址

平面形は円形と思われるが不明確。南北の土層観察壁でみると(第4図)南北3.65mで旧住居内に規模を小さくしてすっぽり入っている。壁は南壁40cm、北壁30cm、主軸方向は炉石の状況から旧住居址と同じでN22°Wである。床面が明確でないため柱穴、周溝はつかめない。旧住居址の床面をみても新たな柱穴はないので、旧住居址の柱穴を再利用したものと思われる。炉は住居中央にあって扁平な川原石を内側に傾けて円形に並べ、入口方向である北側炉縁石は細長い石を置いて、中央を少し掘り凹めた浅鉢状になっている。旧住居址の炉とは北にずれていて、旧住居址入口側炉縁石の上に新住居址炉奥石が重なっていた。炉東側に台石と思われる川原石があり、旧床面より20cm浮いていた。この住居址に明確に伴う遺物は台石以外にはなかった。

旧住居址

焼失家屋であり壁沿いと新住居址床下に木炭の出土が多かった。平面形は正円形で主軸はN22°Wで入口は北である。規模は主軸で4.90m、直交で5.00m、壁高は東壁60cm、南壁58cmと比較的深い。周溝は北東4分の1を除いて巡っており、深い所で7cm、浅い所で4cmある。柱穴は6本で4本が主柱で入口に対支柱があり、主軸上の炉奥に木柱ピット、入口側に入口部ピットがある。炉は床中央より奥よりに掘り込みの深い方形石囲い炉で炉縁石は全部残る。西側炉縁石は板状の花崗岩で被熱風化でボロボロになっている。炉北隅外に半割された小型丸石の基部を僅か

にうめである。床面は全面に堅く、火災にあっているため西側半分と西壁が赤色化している。上屋が西に倒れて焼失したためと思われる。入口部両側に大きな扁平石がおかれており台石である。西台石近くに黒曜石剥片が出土し、東台石の炉側に接して完形土器が倒れていた。奥壁にもたれるように大きな土器片があった。

6号住居址（第5図、5図版）

用地内北西、国道19号に接しており、5号住居址からは北へ15m離れている。落葉松の抜根で東西壁が崩れてしまい確認できなかった。平面形は隅丸方形で主軸はN85°Wで入口は東である。規模は主軸4.40m、直交4.20m、壁はローム上面で東壁48cm、北壁38cmある。周溝は西から北にあって、東南隅にも断続しており、深さ13から7cmある。柱穴は6本で4主柱と入口部対支柱である。入口部にピットがあり、炉の入口側床面に大きく浅いピットがある。炉は中央奥よりあり方形石囲い炉であるが炉縁石は取りはずされ一部残ったり、内部に落ち込んでいる。床面は余り堅くない。北側主柱に接して台石が置かれている。

7号住居址（第6図 6図版）

用地内南部中央にあって、5号住居址より19m東、10号住居址より20m、8号住居址より21m西に離れてある。覆土中に30cm大の角礫が多く、意識的に埋められている。平面形は奥壁が直線となる円形で主軸はN83°Wで入口は西である。規模は主軸5.50m直交5.65m、壁はローム上面から東壁62cm、南壁40cmある。周溝は東南に僅かになく全周し、深さは東で14cm、西で5cmある。柱穴は6本主柱で入口部は対支柱のように間が狭い。入口部ピットがあり、南西主柱に接して浅いピットがあり、その壁より小さな台石がある。炉は床中央より奥にあって方形石囲い炉と思われるが炉縁石はすべて取りはずされ、内部は礫が充満していて人為的破壊埋没を示している。床面は堅緻である。覆土中からの遺物は多い。

8号住居址（第7図 7図版）

用地内東山よりにあって、8～10号住居址と3軒接しており、9号住居址から1m南西に、10号住居址とは4m南東に離れてある。覆土中には7号住居址と同様角礫が投げこまれており、覆土を掘りあげてわかったが、住居内に炉の北東部を壊して土壌が掘られていた。平面形は東西に長い扁円形で主軸はN37°Wで入口は北西である。規模は主軸5.10m、直交5.80m、壁はローム上面から東壁61cm、西壁56cmあり、周溝は全周し16～13cmと深い。東壁で周溝が床側にふくらみ深くなり、その中から大きな土器片が出土した。柱穴は6本主柱で、その掘りこみ状況でみると内側に弧をなす半月形で、西柱穴でみると弦65cm、最大巾25cm、深さ47cmあって、半割材を主柱として注目される。入口部ピットが主軸方向に2つ並んであり、1つは周溝内にある。炉は

床中央奥よりにあり方形石囲い炉であるが、奥炉縁石を残して他は取りはずされている。炉底には石と土器片を敷いていた。床面は堅緻である。住居内に台石はない。

9号住居址（第8図 8図版）

8号住居址の北東に接してあって、焼失家屋のため木炭が多い。検出上面から完形石皿が出土した。火災時に土をかぶせて消火したのか全体的に炭化材が多く、壁には壁板材、床近くに建築材が見られた。平面形は円形で主軸はN-Sで入口は北である。規模は主軸3.50m、直交3.70m、壁はローム上面から東壁54cm、北壁52cmあり、ローム上部には耕作土と黒土が30cmある。周溝は全周し8～5cmの深さで入口部には周溝内と接してピットが3つ並んでいる。主柱は4本主柱で、入口部に細長いピットがある。炉は床中央奥よりに方形石囲い炉があり、炉縁石は残る。入口側の炉縁石は山形状扁平石を頂部が入口に向くようにおいている。炉底には土器片を敷きつめている。北西主柱に接して大小の台石があり、南東主柱北に扁平石があり、その北に三角柱状石が倒れており、立てると石柱となる。そうであると扁平石は石壇であって台石はない。

10号住居址（第9図 9～13図版）

8号住居址より4m北の内部にあって、7号住居址より東20m、12号住居址より東西10m離れている。焼失家屋で木炭の出土が多い。土層観察壁断面でみると、床面に接して数cmの木炭層があり、炉の部分は落ちこんでいる。木炭層の上部には住居内中央へと山形状の焼土があり、炉の部分は落ちこんでおり、土屋根が焼土化したように思われる。柱穴の所は礫まじり褐色土が落ちこんでいて、住居焼失後に残っていた主柱を抜きとったためである。すり鉢状に凹んだ炉には人頭大の角礫が投げこまれていた。壁に沿って壁板材が炭化して残り、奥壁から内側へ柱材（梁）が炭化していて建物は西から東へ倒れたように思われる。住居内の燃焼は相当な高熱であったらしく床面や壁が赤く焼けており、石壇や壁にたてかけてあった石が火熱で割れたり、表面剥離していたり、花崗岩はボロボロになっていた。平面形は奥壁が直線となる扁円形で主軸はE-Wで入口は西にある。規模は主軸4.90m、直交5.90m、壁は東壁50cm、西壁20cm、周溝は入口部と北壁の柱穴外側になく残る部分にあって8～6cmの深さである。入口部で周溝がピット状の掘りこみとなっている。柱穴は6本で4本主柱と入口部対支柱である。炉は床中央奥よりにあって方形石囲い炉と思われるが炉縁石は取りはずされてなく、内部は木炭層の上に礫が投げこまれていた。炉と入口の間にすり鉢状のピットがある。入口部には正位に埋められた埋壔があり、その埋壔に接して内側に開く「ハ」の字形に2個の石が踏み石のようにおいてある。炉奥の床には50cm大の扁平な石と棒状の石をU状に並べ、その中央に扁平石を置いて壁沿い左右に棒状の石を置き、囲まれた中に長方形の石の無い部分がある。その中に直径10cm、深さ20～29cmのピットが2つずつ並んでおり、ピット内は炭化材があつて木柱の存在を示している。住居内には置き石があつて、

南側は入口部支柱と西主柱に接して砂岩と花崗岩の丸石がある。北側では西主柱壁側に平板石が置かれ、その上に棒状の花崗岩があり壁によりかかっていたが、火熱でボロボロになり全体を知ることができなかった。残る基部は丸くて直立はできない。東主柱壁側に断面三角形の長い石があり、火熱で割れ剥離も激しかった。接合してみたら底部に磨面が認められた。この石と石壇との間の壁近くに頭部の折れた石棒が直立していた。基部は床から8cm高く、下は炭層であり、このことは土間床でなく敷き物があったことを示す。石ではないが南東主柱の壁に接して深鉢の大破片があった。入口部の丸石と壁との間の床面に黒曜石剥片が集中して出土し、他の住居址と同様な傾向である。

11号住居址（第10図 14図版）

用地内東隅に3軒が固まってあって、12号住居址の南4m、9号住居址の北6mにある。覆土中に角礫が多くあり、人為的埋没されている。平面形は奥壁直線の扁円形で主軸はN44°Wで入口は北西である。規模は主軸3.70m、直交4.20m、壁は北東壁でローム上面から61cm、北壁は19cmで、周溝は北東壁と北壁の一部にあり深さ6cmある。炉は床中央奥よりあって奥と南の炉縁石を残して他は取りはずされている。入口部対支柱の中間に石蓋をした正位の埋甕がある。北東主柱に接して小さい台石が、入口部西に長い台石がある。

12号住居址（第11図 15・16図版）

11号住居址の北4m、10号住居址の北東10mの所において、13号住居址の南部を切っている。以前調査した3号住居址とは12m南に離れている。焼失住居で、焼失状況は10号住居址と同様である。平面形は奥壁直線の円形で、主軸はN69°Wで入口は北西である。規模は主軸5.05m、直交5.10m、壁は東壁でローム上面から69cm、西壁で44cm、北東壁は13号住居址を切って30cm深い。周溝は東半分と北壁にある。柱穴は4本で2本主柱と入口部対支柱である。2本主柱は主軸の垂直2等分線に接し炉の左右にあるという特徴的な配置である。入口部にはピットが主軸方向に2つ並んでいる。炉奥に木柱ピットがあって、ピット北側に平板石が置かれ、南側には角柱状の石が倒れており、これは石柱である。倒れた石柱頭部壁際に完形の吊手土器が横たわっていた。南主柱の東には平板石を置いて、そこに基部をのせて円錐状の石が倒れていた。これも石柱と思われる。炉は床中央奥より方形石囲い炉で炉縁石は残っている。奥石は花崗岩で他は砂岩である。炉東隅に丸石が埋置されている。入口側の石は山形状の扁平石で頂部を入口側に向けている。この石の南端下部に土器片が入っていた。北壁沿いに台石がある。この台石や石柱は火熱で割れていた。入口東支柱附近から黒曜石剥片が集中して出土した。

13号住居址（第10図 17図版）

12号住居址の北東に接しており、西壁が切られている。3号住居址の南12m、11号住居址の北6mにある。覆土は角礫が多く人為的埋没である。平面形は円形で西壁は排土抜根作業のため不明確であった。主軸N80°Wで入口は西である。壁は東壁24cm、北壁23cmで周溝は東側半分であり12～6cmの深さである。柱穴は2本主柱で、12号住居址と同様に炉を挟んで左右にある。入口部ピットと南壁近くにもピットがある。炉は床中央奥よりに石形石囲い炉で、左右の石が取りはずされている。入口側の石は山形状扁平石である。頂部を入口側に向けている。入口ピットに接して扁平石がある。

土 壙（第12図 18図版）

8号住居址内に掘りこまれている。8号住居址の覆土を取り除いていたら巨大な礫（65×35×30cm）があつて単なる投げこみではないとそのままにして床面まで掘りさげたら、8号住居址の炉の東側をこわして直径1.80mの土壙があり、その中央に巨大礫が据えられており土壙の標識となっていた。土壙は8号住居址床面から深さ80cm、底部が開く袋状で、底から30cm上に石皿がある。炉に接した内部には炉底部が崩れ落ちたために土器片が集中していた。埋没状況から貯蔵用の土坑ではなく、人を埋葬した墓塚と考えた。

IV 遺 物

5号住居址新 (第15図)

明確に5号住居址新とはいえないが、覆土上部出土土器片(1~11)をあげた。いずれも縄文時代中期後半唐草文系土器で、旧住居址との時間差はほとんどないものと思われる。1は下部出土の16と接合する。

5号住居址旧 (第13、15、16、27、32図)

住居内東台石に沿って対把手のつく完形土器(13図2)があり、口縁を欠く小形土器(同1)、南壁に接しての大破片(15図12)がある。いずれも唐草文系土器でⅡ期になる。咲畑系土器(16図3、4)もある。石器は少なく、打石斧(27図1~5)、打石鏃1、石皿片(6)、台石(32図)がある。台石1は新住居址に伴うものである。旧住居址のものは2と3で全長50cm大の偏平石で2が入口部西、3が東にあって、2の台石近くに黒曜石剥片が集中していた。黒曜石剥片は16点あって、最大は4×5cmで重さも10gある。4はカマボコ状の石を半折したもので、立てれば30cmの石柱となるが、カマボコ状頂部に打痕があり、台石と思われる。27図7は炉北隅にあった丸石で直径9cm、高さ6cmの大きさである。

6号住居址 (第16、27、28、33図)

土器はいずれも破片で、16図6~8は唐草文系土器Ⅰ期、他はⅡ期である。28、29は咲畑系土器である。27は下伊那系土器である。石器は打石斧(27図8~16)、横刃石器(17、18、28図1)、打石斧未製品(2、3)、定角式磨石斧(4)、敲打器(5)、小型方形台石(33図1)があり、黒曜石剥片は12点ある。

7号住居址 (13、17~19、28~30、33図)

覆土からの遺物の出土は多かった。土器は定形ではないが器形のわかる土器(13図~5)もある。唐草文系土器Ⅰ期(17図1~5)も少量あるが、殆どⅡ期のものである。下伊那系土器(18図8、10、13~18)もある。19は後期堀之内式土器で、今回の調査では1片出土した。浅鉢の4片が8号住居址浅鉢大破片と接合している。当遺跡では最初の発見であるが唐草文系土偶腰部(19図)が出土している。石器は石匕(28図6)、打石斧(7~20、29図1、2)、打石斧状石器(3)、横刃形石器(4~6)、玄武岩剥片石器(7)、乳棒状磨石斧(8)、定角式磨石斧(9~11)、敲打器(12~15)石錘(16)、磨石凹石(30図1~3)、台石(33図2)は小形五角形の割石で自然面を上にして入口部に置かれていた。この石裏側断面には部分的に磨面がみられる。黒曜石はコア1点、剥片18点、チャート剥片11点がある。

8号住居址 (13、20～23、30、31、33図)

遺物の出土は多く、土器は大破片が多く大形土器の量が多かったことを示している。器形のわかる土器 (13図7～9)のうち、7、8は炉底に敷かれていたのもので、8は筒状で下部がふくらむ特異な形をしている。9は大形の9浅鉢で体部片が7号住居址から出土している。唐草文系土器Ⅰ期も少量ある (20図1～9)。10、11は同一個体で、もう一つ同様土器大破片が出ている。21図10は炉車の周溝内ピットから出土した。22図1は炉底に敷かれていた。2、3は飛驒・東濃系土器、4～8は下伊那系土器、23図1～8は咲畑系土器である。石器は石匕 (30図4)、打石鏃4 (5～7)、玄武岩剥片石器 (8～10)、打石斧 (1～15)、礫石器 (16)、磨石・凹石 (17、18) 敲打器 (19、20、31図1、2) があり、角柱状の石 (33図3) もあって、10号住居址出土の石とともに御物石器に結びつくように思われる。黒曜石剥片20、チャート剥片7ある。

9号住居址 (13、23、24、31、33図)

土器は炉底に敷いていたのがほぼ完形に接合できた (13図10)。唐草文系土器Ⅱ期の土器 (23図)が多く、下伊那系土器 (24図1～4)もある。石器は少なく、覆土上部から彫刻文のある完形石皿 (31図3)、打石斧 (4、5)、凹石 (6) があり、台石は入口部西に大形扁平石 (33図4) と小形五角形石 (5) があって、どちらにも磨面がみられ、特に5はスベスベである。東壁柱穴地に扁平川原石 (7) と三角錐状の石 (6) があって、後者は倒れていたが、立てれば石柱になり、川原石は石壇となる。三角錐状石の三面のうち二面は自然面で、一面は割面であり、その部分に磨面が部分的にみられる。黒曜石は6cm大の角礫片1と剥片4点ある。

10号住居址 (13、24、25、33、34図)

土器は床面出土の小型土器 (13図11) と埋甕 (12) が器形がわかる。埋甕は口縁を欠くが50cm大の大きな土器で、欠けた部分を打調整して平らかにしている。石蓋はなかったためか、内部は底部まで木炭が入っていた。24図5は中期中葉の土器である。他は埋甕も含めて唐草文系土器Ⅱ期の土器 (24図6～10、25図1～5) で、24図8は石段の石上にあり、25図1は東壁に接してあった。咲畑系土器 (6、7) もある。石器は少なく打石斧 (31図9)、敲打器 (10) と黒曜石原石 (7、8) と剥片16が入口部丸石附近に集中してあった。1点であるが8cm大の下呂石もあった。33図8、9は埋甕に接して床面と平らになるように埋められていた踏み石である。34図9は西主柱外に置かれていた平板石で、その上に10の花崗岩円柱状の石がのっていた。火熱でボロボロになって全長はわからないが、断面土層観察では全長40cmあって頭部が太くなっていた。11は北主柱外に置かれていた断面三角形、側面ソリ状の細長い石 (全長40cm以上) で底面はスベスベの磨面となっており、形や大きさと底部磨面から御物石器の原形と思われる。13は南主柱の所にあった花崗岩丸石でやはり火熱でボロボロになってしまった。床面部の残在状況から径30cm大である。

14は入口部南にあった丸石で径40cm大と大きい。12は石壇北に直立していた石棒で、底径18cm、高さ32cmで、頭部まであれば1mを越える大きさと思われる。安山岩で全面敲打調整されている。

11号住居址 (13、25、26、35図)

土器は埋甕 (13図13) が器形がわかる。口縁部と底部を欠く胴部で正位に埋めて平板石 (35図1) を蓋石にしており、蓋石には土器の痕跡が残っている。他はいずれも破片 (25図9～16、26図1～7) で、ほとんど唐草文系土器Ⅱ期で、咲畑系土器 (26図6、7) も少量ある。石器は打石鏃1と小形方形の台石2 (35図2、3) のみである。黒曜石剥片20点と6cm大の下呂石礫片が出ている。

12号住居址 (13、14、26、35、36図)

土器は覆土上部から有孔つば付土器口縁の大破片 (13図6) があり、床面から小形土器完形品 (14、15) 1と吊手土器 (14図) 完形品があった。15は口縁部を欠いているが環状把手が対になっており、沈線文で飾るこの時期としては珍しい土器である。吊手土器は角柱状のとなっている優品である。破片は少なく (26図8～13) いずれも唐草文系土器Ⅱ期である。石器は1点もない。黒曜石は12点で5点は角礫のままで5～7cm大で20～50gのものでこれが打石鏃の原材料となっている。入口部西に集中して出土している。35図4は炉奥柱穴地に上面が床と平らになるように埋めてあった石壇石で、5はその柱穴南側に接して倒れていた角柱状の石で石柱であったと思われる。36図1は入口部地にあった台石で火熱で割れていて、もっと大きかった。3は南支柱車に接して置かれていた石で、この上に2の円錐状石の基部がのって倒れていた。この石の上に立石としてあったと思われるが、基部が丸いので何かをあてがわないと立たない。4は炉東隅に埋められていた直径25cm大の丸石である。26図12は炉石下にあった土器である。

13号住居址 (26、31、36図)

遺物は少ない。土器はいずれも小破片 (26図14～16) で唐草文系土器Ⅱ期である。石器は石棒基部片 (31図11) が出土している。安山岩製である。台石と思われる石 (36図5) もある。

土 壙 (36図)

土壙内から出土した土器片は8号住居址炉底に敷いた土器片で崩れ落ちたものである。中央部の底に近い所からはほぼ完形の彫刻がある石皿が出土している。多孔質安山岩製である。

遺 構 外

今回は遺構中心に調査したので、遺構外出土の土器、石器はない。住居址覆土や5号住居址を

切って流れていた水路内から灰釉陶器片が出土している。碗と皿片である。他に2点角柱状鉄釘が出土している。

V 調査にかかわって考えた事

1 住居址の規格性

現在、家を建てる時設計図を書いてから建設するのが普通である。その設計図初現は縄文時代中期後半Ⅱ期からではないかと思われる。それ以前の住居址に規格性はないとは断定できないが中期中葉から後半Ⅰ期の住居址と後半Ⅱ～Ⅲ期の住居址を較べると、その整然たる姿に驚かされる。伊那谷から諏訪そして松本平の住居址に地域性を越えた共通性は、唐草文系土器の広がりの中であるためと思われる。同じ唐草文系土器分布圏の中にある木曾はどうかと思ってお玉の森遺跡の住居址についてみたら、他地域と同様な規格性が認められた。

平面形態には円形、扁円形、隅丸方形と違いがある。この違いが同一遺跡の中でどのように決められるのかわからない。しかし、どのプランであっても基本的な規格は共通している。

①遺跡の中でまずどこに住居を建てるか決め、入口の方向を決める。住居の配置は集落全体の中で、セットとなる住居との兼ね合いで決まっている。

②入口の方向が決まると、入口から奥へと主軸方向と、主軸の長さを決める。この長さによって住居の大きさが決まる。大きさはその住居に住む人数（家族構成）によって決められる。

③主軸線上に入口部埋甕（ピット）、炉、奥木柱ピットの位置を決める。炉は主軸の中点を基点にしてそこに入口側炉石の中心をおき、中点から奥壁までの2分の1（全体の4分の1）に奥炉石を据える。


④炉は方形石囲い炉で、奥と両側の炉石は扁平石を用い、扁平面を炉内に向くように立てており、入口側の炉石は柱状または板状の石を用いている。炉石の在り方と炉の位置で入口と奥がわかる。炉内掘りこみは深い。

⑤柱穴は主軸線に対して対称になるように設置される。主柱、入口部対支柱の住居内位置については、主軸中心からの同心円法、中心角法、主軸線と中点直交線の等分割法などがいわれている。

⑥原則として4本主柱が普通で、円形プランの時は奥主柱と入口主柱とが中点直交線に対して対称になることが多いが（第37図1、2）、扁円形プランでは入口主柱が中点直交線に近づいている（3、4）。6本主柱では中間主柱が中点直交線上にある（5、6）。

⑦お玉の森遺跡ではじめて確認された2本主柱は中点直交線上かそれに接してある（7、8）。

2 10号住居址から

①まず注目されるのが奥壁部石壇である。村内ではマツバリ遺跡で同時期の石壇が2軒から検出されている（第38図3、4）。「」形に石を配置し、前石の内側中点に接して石柱を立ててい

た。それに対して10号住居址では扁平石を敷き並べている。最も近い似た敷石石壇は駒ヶ根市反目遺跡（2）がある。反目遺跡では中央に石皿を据えており、敷石も横に長く支柱間に及んでいる。10号住居址では基本的にはマツバリ遺跡と同様に「L」に囲み、中央に扁平石をおき、壁沿い左右に柱状石を置いている。中央扁平石が意味をもっているかも知れない。この石の左右に石のない空間部があって小ピットが2つ並んであり、火災にあったため木炭がみられ、木柱が立てられていたことを示す。2本ずつ4本立てられていたかは不明だが、このことにより石壇のない奥ピットも木柱が立てられていたことを示す。木柱を立てることのできる深さではないが、マツバリ遺跡でも石柱の左右に浅い掘り込みがみられる。

②入口からみて右空間は男の間、左空間は女の間といわれているが、10号住居址では右空間に丸石が2つ、左空間からは石棒、三角柱状石、円柱状石があって、柱穴に接してそれらが置かれていて、意識した配置がうかがわれる。他の住居址でも台石の置き方が同様である。

右空間の丸石は入口部対支柱と入口よりの支柱に接してあり、床面にピッタリついていた。住居内丸石は各地で知られており、反目遺跡では左空間奥支柱に接し、茅野市棚畑遺跡（5）では左空間入口支柱に接してあり、この住居址では扁平石や柱状石も多い。真田町四日市遺跡（6）では右空間に2つある。こうしてみると丸石の住居内位置に規則性はないように思える。丸石に対して特別な意識があって持ちこんでいることはうかがわれる。どの住居址にもあるものではない点は注目したい。お玉の森遺跡では5号住居址の炉入口側左隅に小形半球状の石をおき、12号住居址では炉左側奥隅に大きな丸石を据えていた。

石柱状の石の住居内持ちこみは多い。10号住居址では左空間の入口側支柱に接して扁平石をおき、その上に円柱状の石をのせて壁にもたせていた。これに近いあり方は12号住居址では右空間奥支柱に接して扁平石をおいて、その上に円錐状の石の基部をのせて石は倒れていた。左空間奥支柱に接して三角柱状の石を床に据えていた。しかもこの石は底面に磨面が見られ特別な使用があったことを示している。

石棒は奥支柱と石壇の中間に直立しており、しかも床面から浮いており、石棒の下に敷ものがあったことを示している。頭部が欠けているが直径の大きさからみて全長は1m近いものである。原位置がここなのか、石壇の中央扁平石にのせて使用していたのではとも推定される。

丸石は女性、石棒は男性といわれているが、そうであると置かれている空間からみると、10号住居址は右空間が女の間、左空間が男の間ということになるがどうであろうか。

③入口部埋壘に接してある「ハ」の字形の2つの扁平石には驚いた。住居に入った人がここに足を置くといった踏み石と思われるが、入口より内側にあって、ここにどのような姿勢で人は立ったのかと想像をたくましくさせてくれる。住居内に2つの扁平石を並べた例は棚畑遺跡2号住居址（7）がある。これは入口側にあるが埋壘とは離れており、「ハ」の字形に開くのではなく並列している。並列している例は平成9年9月の調査で未報告であるが、お玉の森遺跡と尻平沢川

を挟んで北にある上の原遺跡3号住居址にもみられた。しかし、この住居址では埋葬はなく、石も主軸上ではなかった。

3 12号住居址から

①意識して選んでいる入口側炉縁石。炉縁石（炉石）はいずれもどこに据えるかを考えて川原転石から選んできているが、12号住居址入口側炉縁石は鈍角山形状の石を選び、山頂部が主軸線上にくるように据えている。同様な炉縁石のあり方は9、13号住居址にもあり、一つの特徴となっている（第39図1、2）。特に注意して文献を見ていないが、関市塚原遺跡に同様な炉縁石の住居址（3、4）があり、木曾川を通しての交流が考えられる。

②木柱石壇か。この住居址では炉を挟んで左右（南北）にある2本主柱を上屋を支える主柱とし、入口部対支柱、炉奥のを木柱ピットと考えている。このような柱穴のあり方について、5本主柱と考える研究者も多い。自分はこの時期の住居址が炉奥を神の座として特別扱っていることから、下伊那型石壇が炉奥ピットを石で囲んでいる（同じ例がマツバリ遺跡にもある）ことから、主柱ピットではなく木柱ピットと考えている。12号住居址ではピット北側に接して断面鈍角形をしている細長い扁平石（第35図4）を平坦面と床面と平らになるように埋めて設置して、南側に接して長さ61cm、24cm角の角柱状石が倒れていた。立てると直立するので石柱と考える。壁際には完形吊手土器があり、祭祀の施設（場）と考えられ、ピットの中には木柱を示す木炭があった。炉奥木柱ピットは5号住居址にもあった。

③炉隅埋設丸石。この住居址の炉奥東隅の石は直径25cm大の丸石を埋設設置している。5号住居址では炉の入口側北隅外に小形丸石の半球状に割ったものを置いていた。当遺跡では類例がないが、岐阜県や県内の同時期の住居址で炉隅に円柱状の川原石を直立設置するものがある。この場合は2隅か4隅が多い。丸石ではないが石棒を炉縁に樹立させているものがある。丸石と石棒とは違っているが、同様に特別意識をもって埋設設置したものと思う。山梨県高根町社口遺跡31号住居址では住居廃絶時の行為と思われるが炉内に炉にはめ込むように丸石をおいていた。炉と丸石と特別なつながりを示す例と思われる。これは廃絶時であるが、当住居址では使用との関係が強い。もう少し大きい丸石は10号住居址に2ヶあって、これは柱に接して床面におかれており、炉とは離れていた。

④扁平石と石柱。南側主柱の東に接して杓子型の扁平石（36図3）の上に基部をのせた石柱（2）が倒れていた。長さ55cm、基部22cm大の円錐状の石で、基部が丸味もっているのものでそのままでは直立しない。支える円座があったものと思う。扁平石の上に基部が丸い円柱状の石を置いたものは10号住居址にもあった。同様な円座があったものと思われる。

石柱（立石）と思われる石は5号住居址で入口部（32図4）に、10号住居址では東壁に接して三角柱状の石があり、割面に磨痕がある（33図6）。この石の南には石壇と思われる石（7）が

ある。

4 住居内に持ち込まれた石

今回調査した住居址には人為的に石を投げこんで埋めている住居址がいくつかあった。それらの礫は遺跡内にある角礫が殆どであった。こうした角礫とは違って床面から川原石がいくつもあった。大小の川原石があるということは尻平沢川や木曽川から持ち運んできたものであり、遺跡まで運び、住居内に置くということは目的意識があつての行為と考えられる。何を目的にしたかが課題である。武藤雄六さんはこのような石は、調査時に石があるなと一瞥するだけで取りあげて観察していないのが普通であるので、研究者はこの石に注意しその目的を考えるべきだと蘇らせたい石と指摘している。今回の調査で一見してわかる川原石なので多くを取りあげて作業所に持ちこんだ。

もう一つ、調査中に作業員のおじさんに指摘されたのは花崗岩の存在でした。5号住居址と12号住居址では炉縁石に、10号住居址では丸石と石柱に花崗岩が使われていた。他は全て砂岩である。おじさんがいうのに宮の越の木曽川には花崗岩はないということでした。木曽川では白い川原、黒い川原という言葉がある。木曽福島町から下流、特に上松町の滑川が合流してからは川原の転石は全て花崗岩で白一色である。日義村から上流は花崗岩は全くなく砂岩、粘板岩ほどの黒っぽい石のみで黒い川原といえる。お玉の森遺跡の花崗岩は日義村と木曽福島町の境となっている正沢川までいかないといふ。距離にして南へ3kmで、途中にマツバリ遺跡があり、700mの木曽川に較べると遠いが、わざわざ足を運んで持ってきている。

住居址内の川原石を見ると多いのが台石である。台石には三種類あつて、直形60cm大の長く大きい台石で5 (32図2、3)、9 (33図4)、11号住居址にあつて、9号住居址の台石には磨痕がある。33~40cm大の扁平川原石は5新 (32図1)、12 (36図1)号住居址にある。もう一種は20~30cm大の小形方形の石で、6 (33図1)、7 (2)、9 (5)。11 (35図2、3)、13 (36図5)号住居址にあつて、9号住居址のそれはスベスベの磨面がある。これらの台石の多くは入口右にある例 (5例)が多い。この附近から黒曜石やその剥片が集中して検出されているのも作業場と台石の関連を思わせる。

角柱状の石は8、9、10号住居址にみられ、9号住居址のは三角錐形で石柱と思われる。8号住居址のは三角錐状で (33図3)、基部の突起のある方を上面にして床におかれていた。10号住居址の断面三角形で長い方の一端が舟底状にあがる石 (34図11)は全長41cm、高さ17cm以上、底面巾12cmの大きさである。底面は全面的に磨面となつていて、この磨面底部を床につけておかれていた。8号住居址のそれと共に御物石の祖源となる石のように思われてならない。

5 住居内墓塚

8号住居址内に炉の一部を壊して土壌があった。内部に礫を充満させ、その上部に標識のように特別に大きい礫を据えていた。土壌内からは略完形の石皿があり副葬品と思われる。人骨は検出されなかったが、貯蔵用の土杭ではなくて人を埋葬する墓塚と考えた。

住居内埋葬は廃屋葬といわれている。関東に集中して類例が多く、それらは床面か覆土中に埋葬され、床面に土壌を掘ってという例は少ない。中期後半から後期にかけて多いという。8号住居址の墓塚にもっとも似たのが千葉県千葉市加曾利南遺跡J D16号住居址(39図6)で、人骨も残っており仰臥屈葬している状態がよくわかる。当遺跡のもそうした埋葬であったと思われる。普通、墓塚は中央広場につくられている。このように住居内にある例は少ないので、8号住居址と関係のある人の埋葬と考えられる。特に8号住居址は半載木柱を支柱としている他の住居址とは全く違った住居構築であるので、この居住者は日本海岸地域とつながりのある特別な人とも考えられる。半載木柱は石川県から新潟県の地陸地方に類例が多い。ただ時期的にはお玉の森遺跡は中期後半であるのに、北陸は晩期という時間差があり、今後、住居例について注意して見ていかなければと思う。

6 吊手土器

12号住居址からは奥壁に接して完形吊手土器が出土した。木曾地方では三岳村若宮遺跡に次いで2例目である。左右に角柱状中空の把手を立てた優品で、宮城孝之さんの論文によると第I種で、中期後半Ⅱ期に盛行し、松本平、伊那谷、諏訪そして山梨県に分布するという(40図1、2)、第I種の多くは鏝下の鉢部に橋状把手をつけていない(5)が、当遺跡のは角柱状把手の下に橋状把手をつけている。同様に橋状把手をもつものは上伊那郡箕輪村北高根遺跡(4)にある。どちらも押しき沈線文で飾っており器形だけでなく施文まで共通しており、権兵衛峠を越えて上伊那北部とのつながりが考えられる。

7 住居の廃絶

竪穴住居は居住者が住むために作られたものである。現在もそうであるが住居の廃絶にはいろんな理由があり、昔も今も変わらない理由でその住居に人が住まなくなる。大きくは3つの理由が考えられる。まず住居が古く痛んで住めなくなった。次に、居住者や居住集団(集落)の移動、そして不慮の出来事(火災、洪水、病気、死等)です。この3点である。住居をすてるにあたっては、上屋をそのままにして自然崩壊させる。もう一つは人の手で上屋を壊す場合があって、後者には建築材など取りはずしてから周囲の石を投げこんだり土で埋めたりする場合と火をつけて消失させる場合がある。

お玉の森遺跡の調査は工事着工がせまっている。調査費がないということで用地内の遺構を確

認しその検出に急いだため十分な観察のできない調査であった。事業主体者に何等かの事情があったのか土地造成工事はされないままに一年たった。冬を越した後と丁度一年たった後、各住居址がどうなっているかみた。一冬越えた住居址は冬の霜や凍上で壁上部が崩れ落ちていた。(第25図版)。一年たった秋には遺跡地は草が大きく成長して入って歩くのに苦労したが、住居址内には草は殆ど生えていないが、周囲にはすごくツル草が竪穴壁へと伸びていた。来年は住居址内にも草が一面に生えているものと思われる。一年の経過をみてわかったことは竪穴住居址に上屋がないと壁面は上部からどんどん崩れていくが、その崩れは住居内面深くまでは入らない。中央部までスリ鉢状になるには年数がかかるか、洪水などでの土砂の流れこみがないとだめである。調査時に壁面が直であることは、上屋構造物が残っていたことを示す。あるいは普通ローム面で検出するがローム面よりさらに上層の黒土中に掘り方があったり、壁外に土手状の盛り土があったのかもしれない。もう一つは人為的に埋没したために壁が崩れていないとも考えられる。

住居址の炉をみると、炉縁石が全て取りはずされているもの(7、10号住)、一部残されているもの(6、8、11、13号住)、全部残っているもの(5新、5旧、9、12号住)とあって、炉石をはずす行為は住居廃絶行為で、炉石を新住居にもって行って再使用する場合もあるし、住居内床や住居外にすてることもある。6、10号住居址では炉石をとりのぞいた後に炉内に礫を充填させており、何かを封鎖する行為と思われる。以前調査した3号住居址も含めて、3、5新、6、7、8、11、13号住居址は住居内に石を投げこんで埋めており、5旧、9、10、12号住居址は家屋に火をつけて焼失されている。どちらも人為廃絶であり、前者を投げ込み廃絶、後者を焼失廃絶と区別できる。前者には器形のわかる土器の投げ込みはなかった。

8 住居のセット関係(第41図)

用地内の住居址をみると、尻平沢川扇状地に扇頂部から山より扇縁、そして扇端にと孤状に住居址が並び、中央に空間があり中央広場をつくっているようにみえる。こうした住居の配列は当初からあったのではなく、何回か建て替え移動したりするうちにできた結果で、10軒がずっとあったのではない。住居の時間差は土器の上からは区別できないので、土器の一型式の時間内(数十年くらいといわれている)にくりかえされたものである。13号住居址を12号住居址が切りあっていることや、8、9、10号住居址の接近状態から同時存在は考えられなく、2～3回のくりかえしと思われる。

住居址の大きさをみると大、小の違いがあり、これは大+小のセット2棟単位が考えられる。そうしてみると、3-13号住居址は主柱穴の配置に共通性がみられ、8-11号住居址は炉の残存状況や入口方向が同じであり、投げ込み廃絶である点に共通性がみられる。12-9号住居址は炉石が完全に残り、焼失廃絶が共通していて、これらのセットは妥当に思われ、時間的には12-9号住が新しい。10号住居址の相手がわからない。炉をこわして石で埋めている点では7号住居

址と共通し、住居址出土土器片が接合した点結びつける要素があるが、廃絶行為が焼失と投げ込みの違いがあり、どちらも大一大である点ためらいを思う。5号住居址は焼失廃絶で共通するが、炉の残り方が全く違出し、大一大でもある。同じ大一大なら10-7号住居址の方がよい。5号住居址は新・旧の2つがあって、どちらも炉石は残るが、旧の方は焼失廃絶で、12-9号住居址と同じで同時性を思わせる。投げ込み廃絶でみると7-6号住居址の大小も結びつきが考えられる。用地内南西部については調査地外にも住居址の存在が考えられるし、建物があって調査できなかった北隅にも住居の存在が考えられる。

10号住居址はこの遺跡の中で特別な住居であって、単独存在があったとも思われる。

5号住居址は炉石を残して焼失廃絶し、その中に小さく新住居址をつくっている。どちらも炉石を残しているの、どちらも結びつく相手は調査地内にはないが、こうしたあり方から、今回の調査で検出された住居址は、人為破壊し投げ込み廃絶した3-13、8-11、7-6の3群が古く、12-9、5旧がそれにつき、5新が一番最後という3回の建て替え移動が考えられる。

附 以前検出住居址 (第42図)

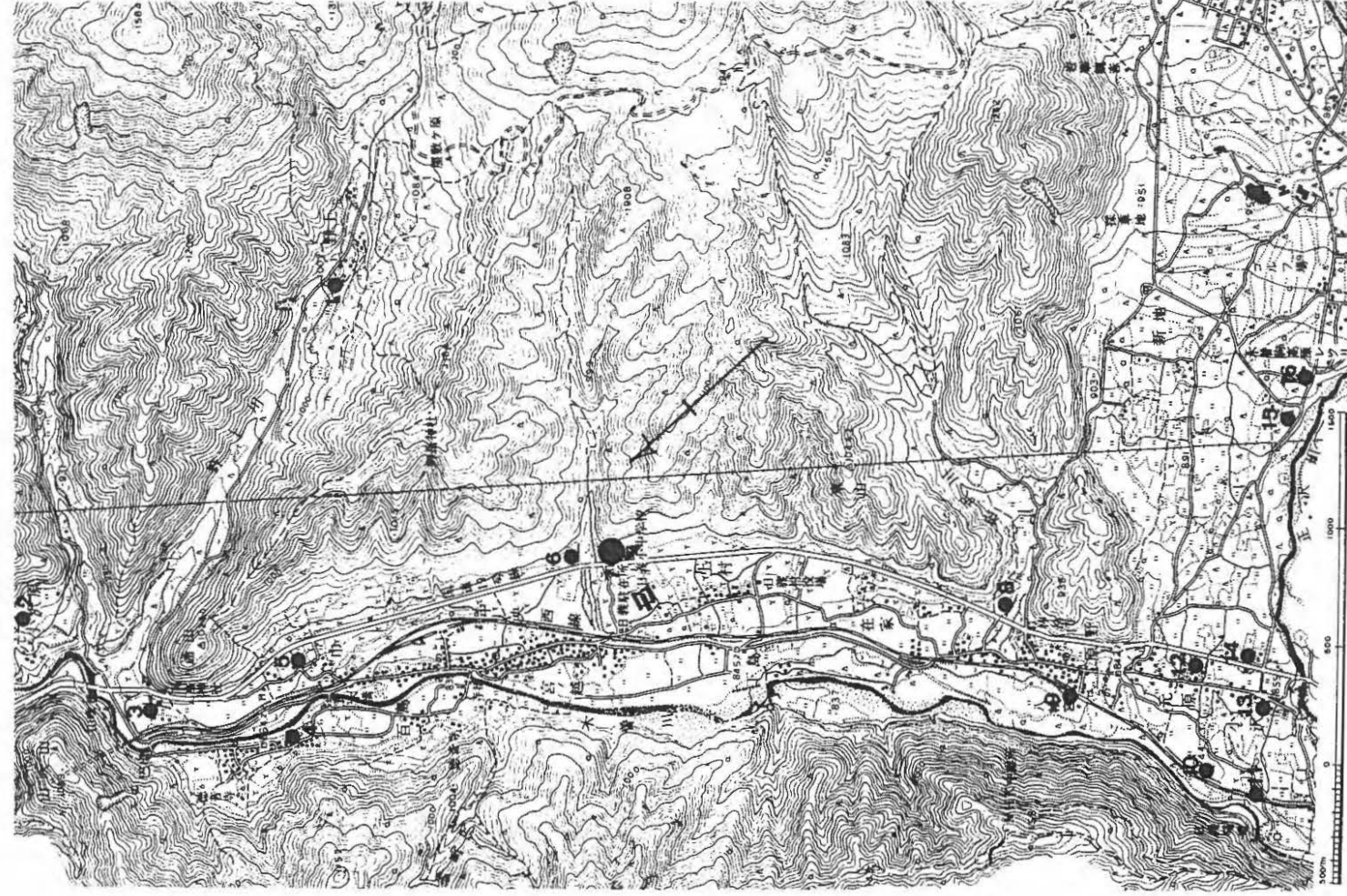
1号住居址は昭和37年(1962)に水道管理設工事で炉が検出された。今回調査した用地の東山裾である。2号住居址(42図2)は昭和37年秋、水道管理設溝断面に竪穴住居址が確認され、その一つを調査した。直径4mの西南半分である。その後の開発で現在どの地点かを確認できないが、国道より木曾川よりの水道タンク附近と思われる。3号住居址(3)は日義小中学校水道タンク建設に伴って49年(1974)に調査したもので、南北6.40m、東西6.40mの円形住居址で、入口は西である。炉石の一部残しこわされた方形石囲い炉である。主柱は4本主柱であるが、前主柱が炉の左右にあるという12、13号住居址と共通するあり方である。この住居址は今回調査した用地内にある。4号住居址(4)は平成2年(1990)に名鉄宅配センター建設に伴って調査したもので、4.00m×4.40mの隅丸方形で、炉は奥炉石を残して取りはずされている。4本主柱で入口部ピットがある。入口は東である。

参考文献

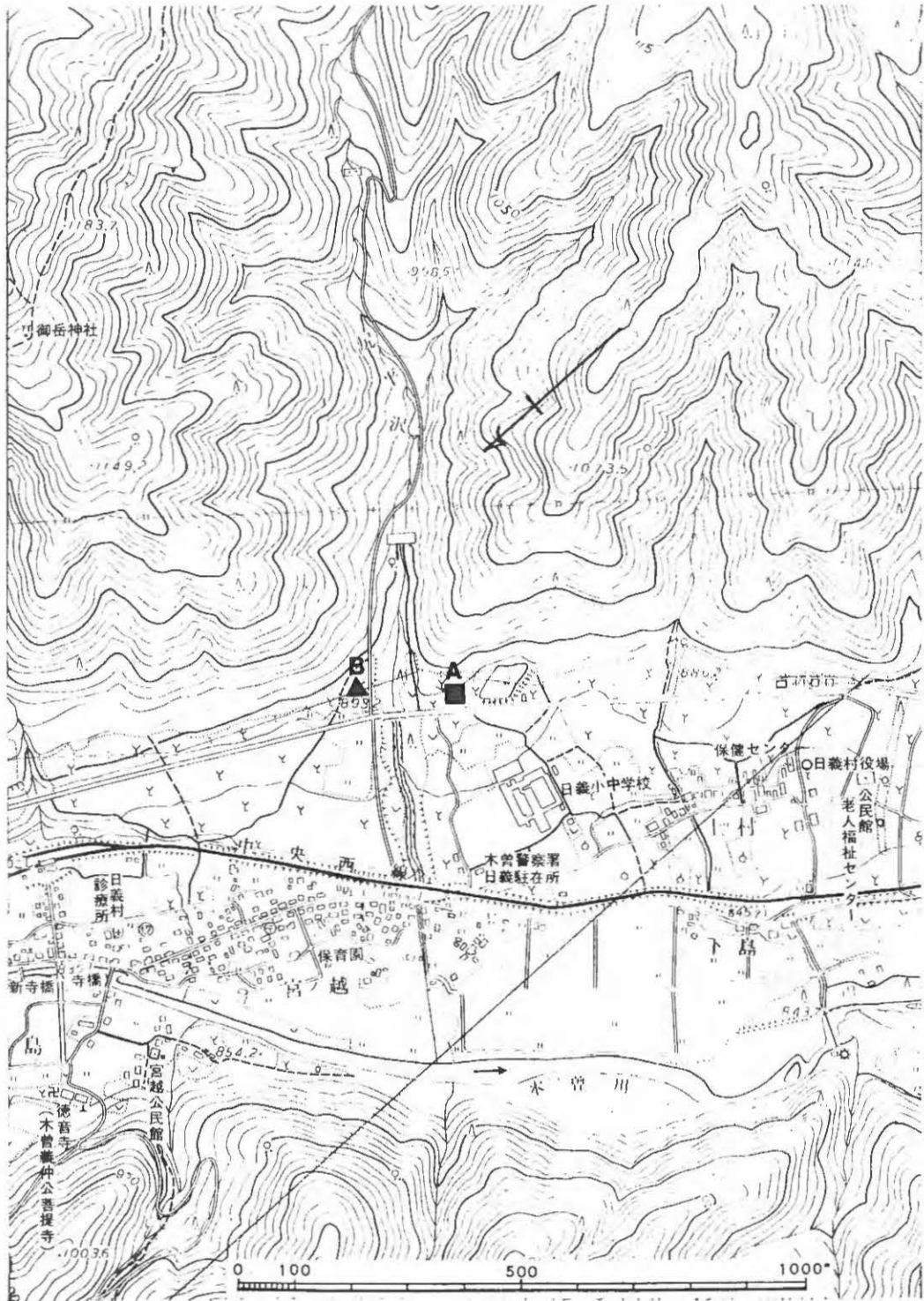
- 1965 桐原 健 住居址内における火使用の問題 井戸尻
- 1965 神村 透 木曾・日義村の考古学的調査(一) 信濃17-11
- 1969 水野正好 縄文時代集落研究への基礎的操作 古代文化21-3・4
- 1969 可見通宏 住居の廃絶と土器の廃棄 多摩ニュータウン遺跡調査報告書
- 1975 加藤 緑 中期縄文人のすまい CIRCUM PACIFIC 1
- 1976 日義村教育委員会 御霊森遺跡
- 1976 桐原 健 土器が投棄された廃屋の性格 考古学ジャーナル127

- 1976 山本暉久 敷石住居出現のもつ意味 古代文化28-2・3
- 1976 長崎元広 石棒祭祀と集団構成 どるめん8
- 1979 大塚和義 縄文時代の葬制 日本考古学を学ぶ(3)
- 1981 武藤雄六 石に宿っていた祖先の霊 山麓考古13
- 1981 末木 健 縄文集落の継続性 考古学ジャーナル133
- 1981 対談 丸石神と考古学 どるめん28
- 1982 宮城孝之 縄文時代中期の釣手土器 中部高地の考古学Ⅱ
- 1982 相原 健 炬から見た縄文住居の性格分割 考古学ジャーナル207
- 1983 水野正好 縄文社会の構造とその理念 歴史公論94
- 1983 桐原 健 屋内祭祀 歴史公論94
- 1984 百瀬忠幸 縄文時代における地域性と地域集団 異貌11
- 1984 鈴木保彦 集落の構成 季刊考古学7
- 1985 末木 健 土器廃棄と集落研究
- 1985 村田文夫 縄文集落
- 1985 山本暉久 縄文時代の廃屋墓
- 1985 田中 信 住居空間分割に関する一試論 土曜考古10
- 1986 桐原 健 土器型式の時間幅 異貌12
- 1986 小林達雄 原始集落 日本考古学4
- 1986 南 久和 晩期の巨大木柱列 真脇遺跡
- 1989 関市教育委員会 塚原遺跡 塚原古墳群
- 1989 田代 孝 縄文時代の丸石について 山梨考古学論集Ⅱ
- 1990 桐生直彦 火災住居から見た家財道具のあり方 東国史論5
- 1990 石野博信 日本原始・古代住居の研究
- 1990 茅野市教育委員会 棚畑
- 1990 真田町教育委員会 四日市遺跡
- 1990 駒ヶ根市教育委員会 反目、遊光、殿村、小林遺跡
- 1990 水野正好 鳥国の原像
- 1991 日義村教育委員会 長野県木曾郡日義村お玉の森遺跡(第8次調査)
- 1991 江森正義 住居址覆土の堆積過程に関する覚書 下総考古12
- 1992 勅使河原彰 縄文時代の社会構成 考古学雑78-1、2
- 1993 金井安子 縦穴住居の間取り 季刊考古学44
- 1994 大島直行 縄文時代の火災住居 考古学雑誌80-1
- 1994 山本暉久 石柱・石壇をもつ住居址の性格 日本考古学1

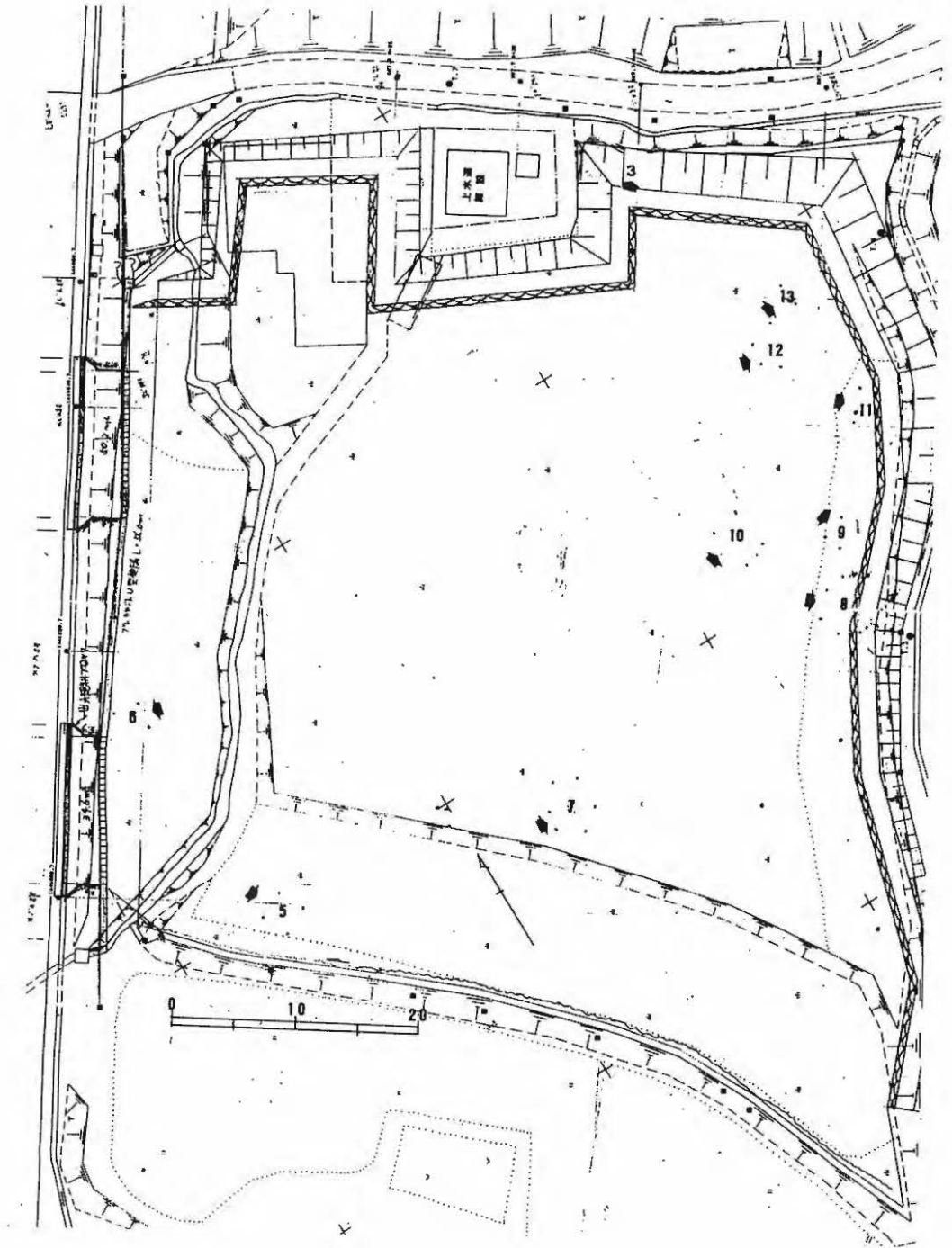
- 1995 花輪 宏 屋内葬考 考古学研究42-1
- 1995 小林謙一 住居跡ライフサイクルと一時的集落景観の復元 縄文中期集落研究の新地平
- 1995 日義村教育委員会 マツバリ遺跡
- 1996 山梨考古学協会 すまいの考古学「住居の廃絶をめぐる」
- 1996 小林達雄 縄文人の世界
- 1997 金井安子 縄文人と住まい 青山史学14
- 1997 関間俊明 縄文時代の焼失住居跡に関する一考察 青山史学14
- 1997 高根町教育委員会 社口遺跡第3次調査報告書



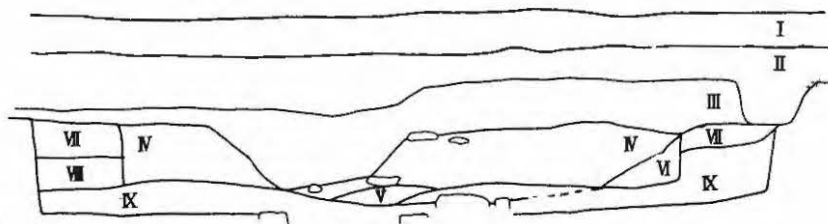
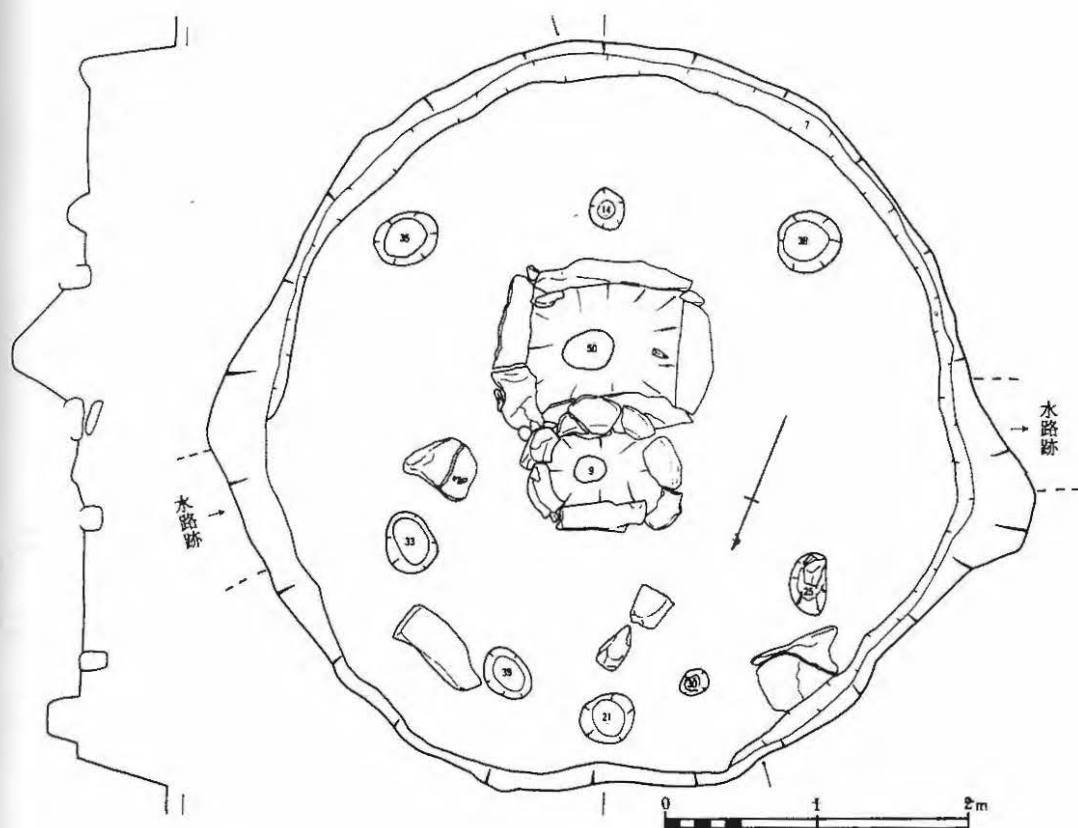
第1図 日義村の主な遺跡分布図



第2図 遺跡附近地図 (Aお玉の森、B上の原)

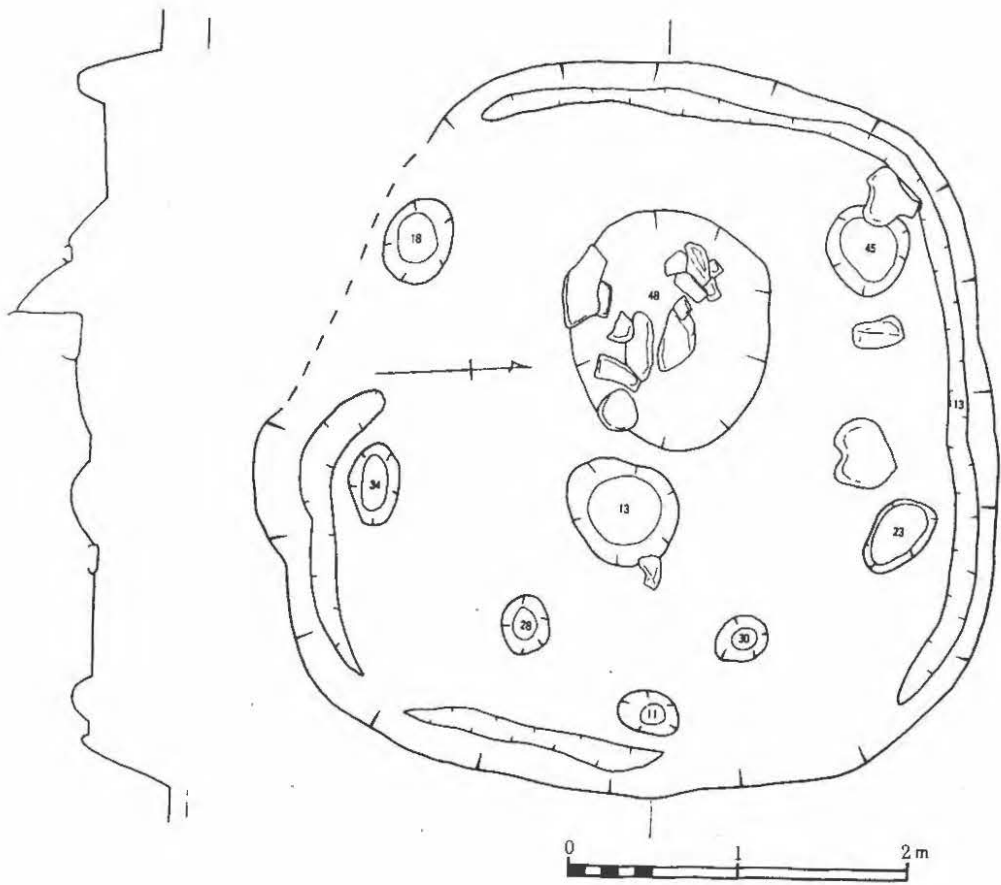


第3图 用地内住居址位置图

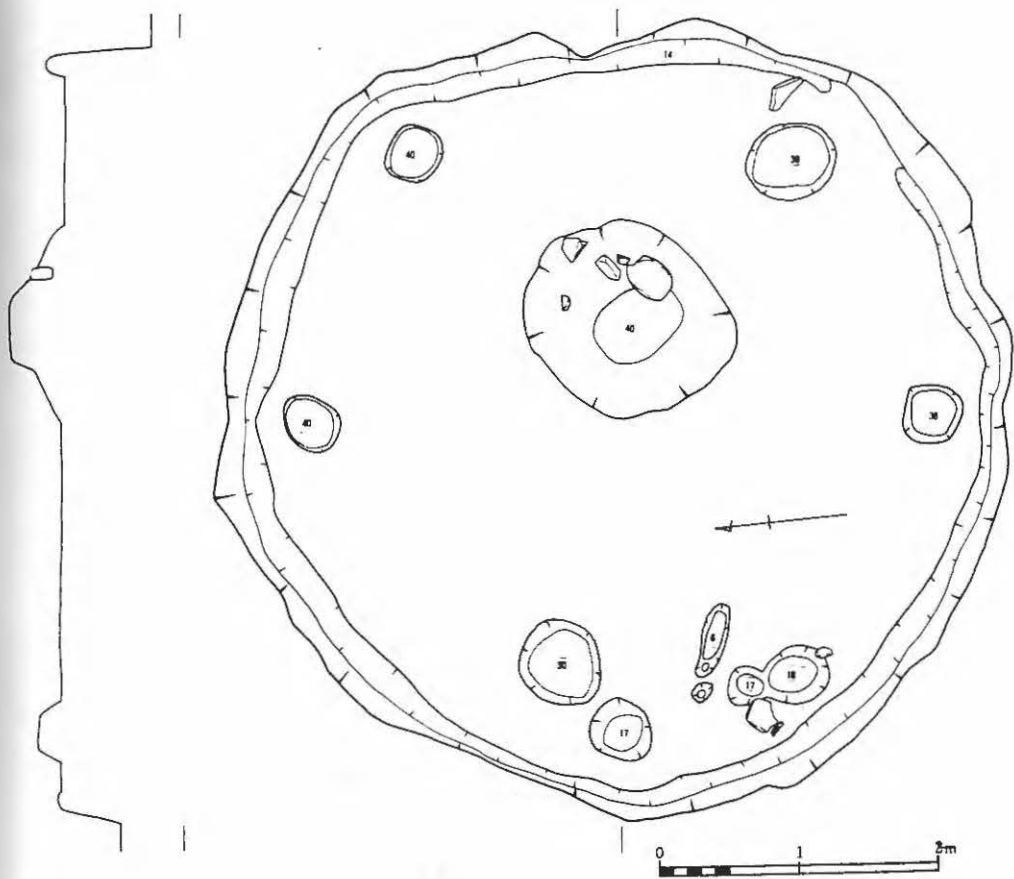


- I 耕 土
- II 埋め土
- III 褐色土
- IV 角礫の多い褐色土
- V 砂 利
- VI 礫まじり茶褐色土
- VII 礫まじり褐色土
- VIII 礫の多い褐色土
- IX 炭・礫まじり茶褐色土

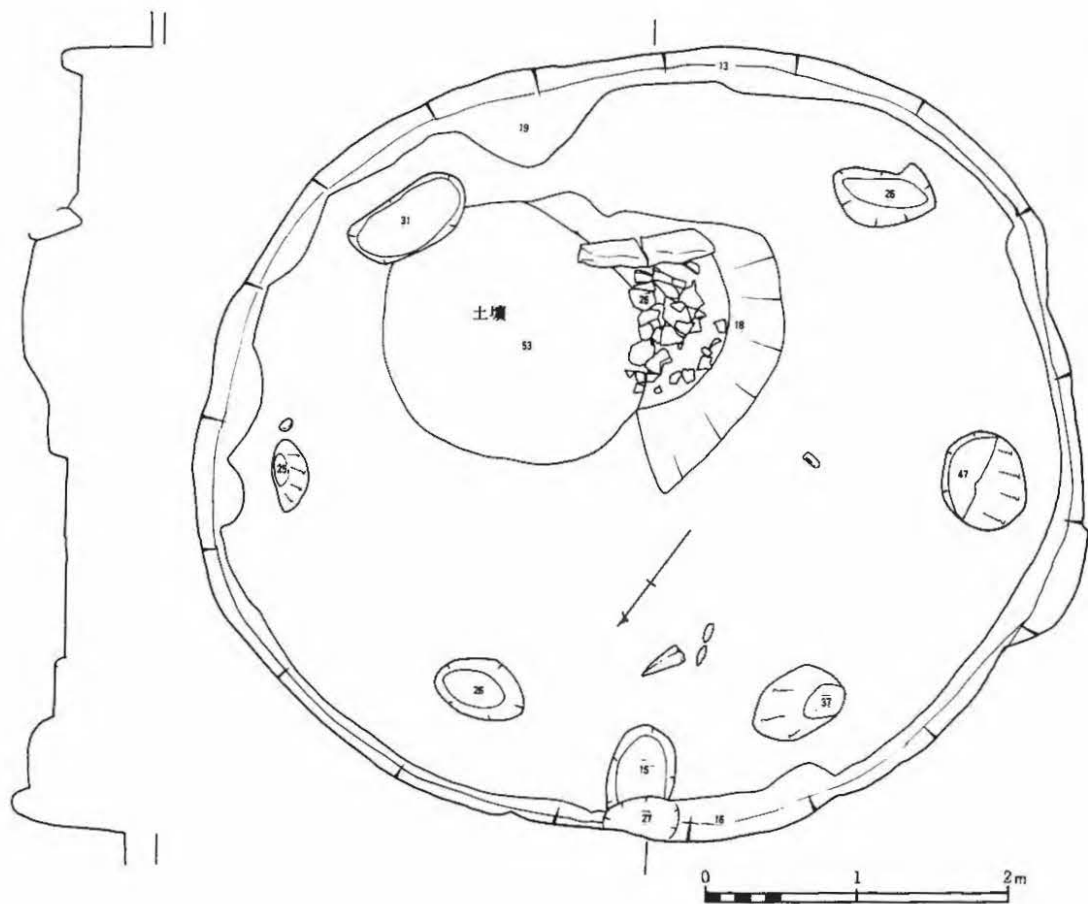
第4図 5号住居址



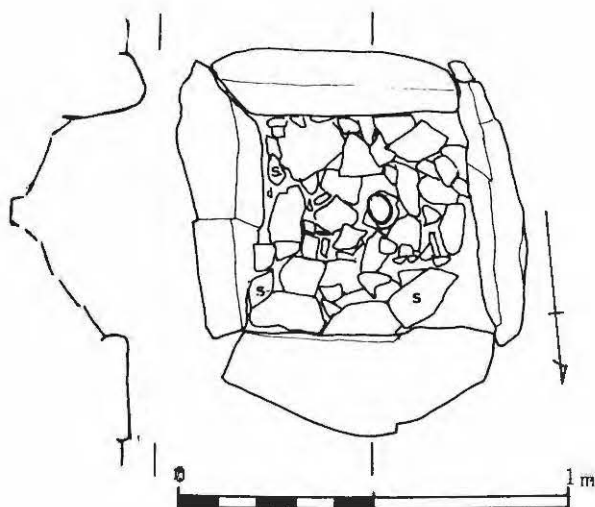
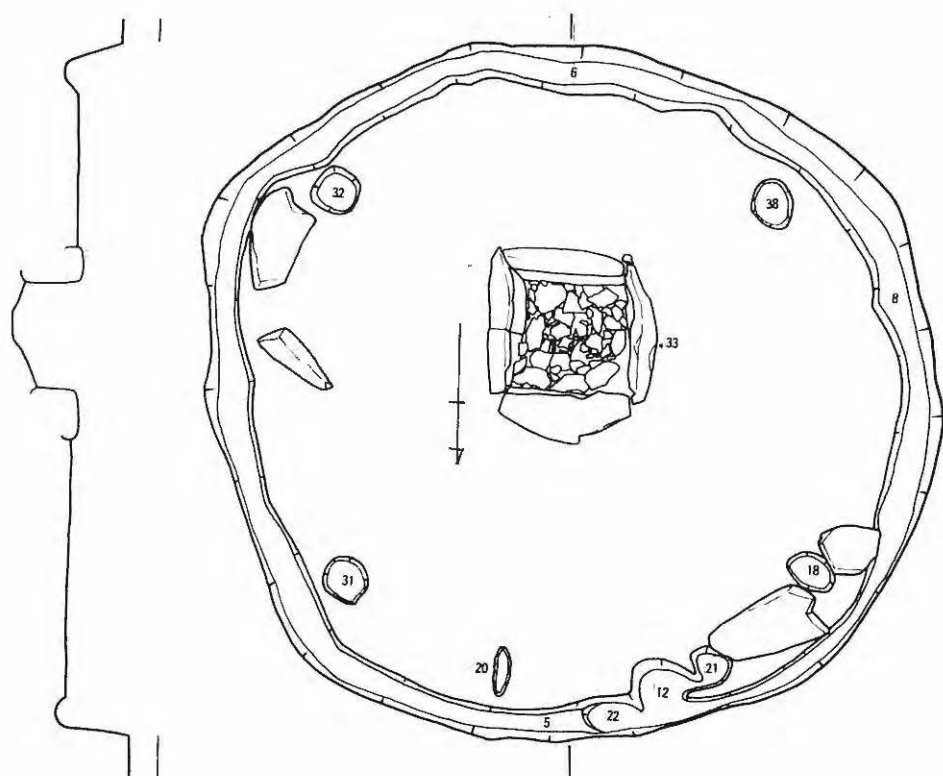
第5図 6号住居址



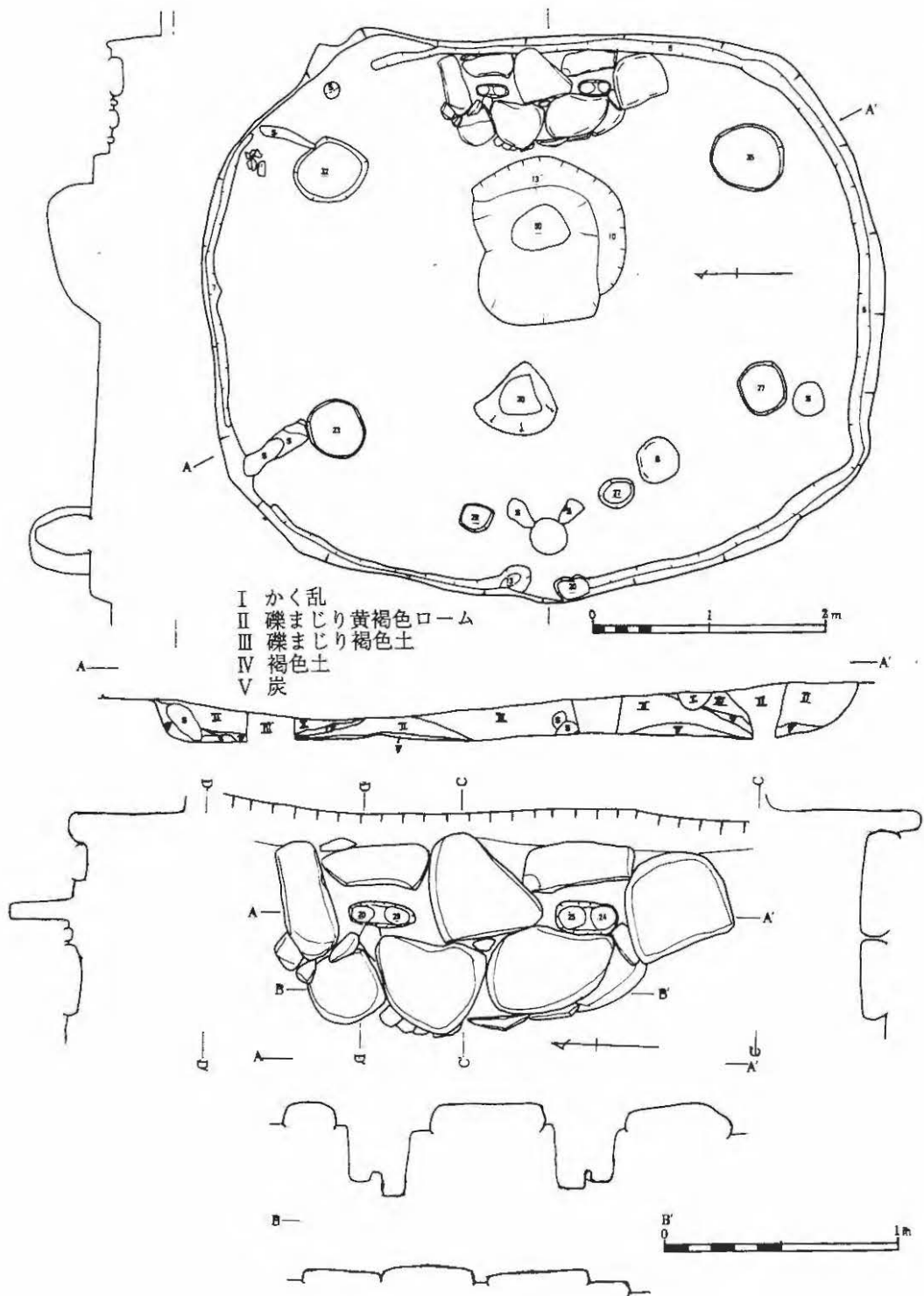
第6图 7号住居址



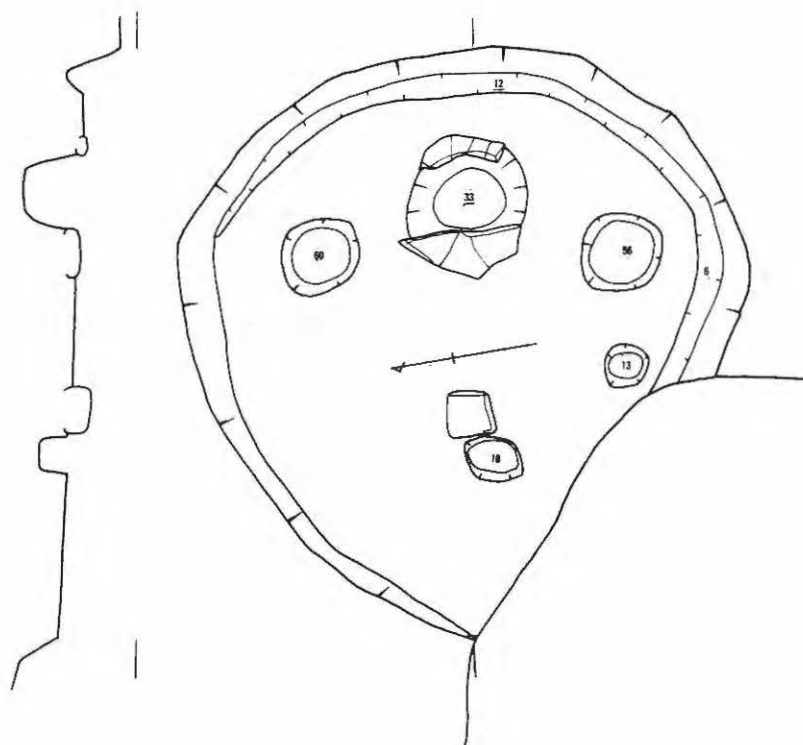
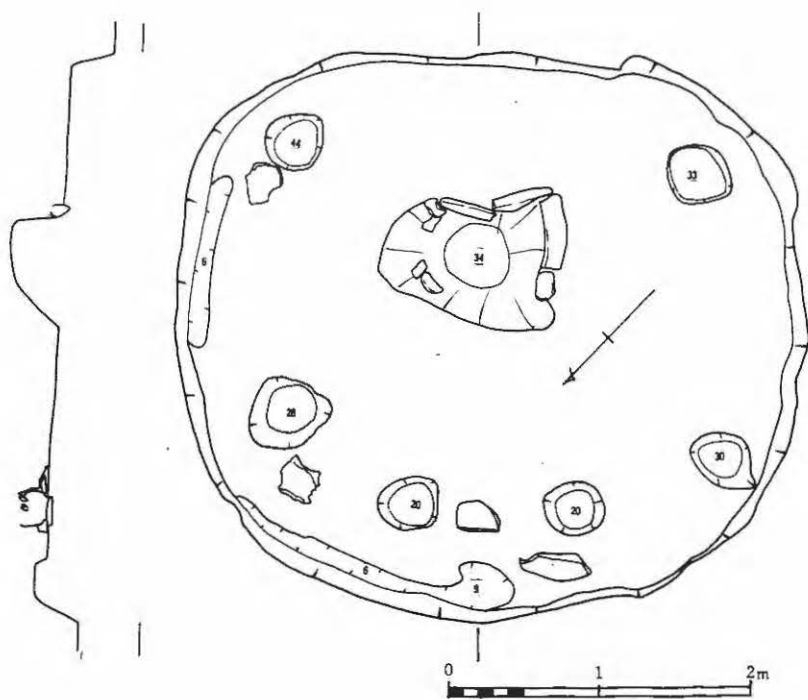
第7図 8号住居址



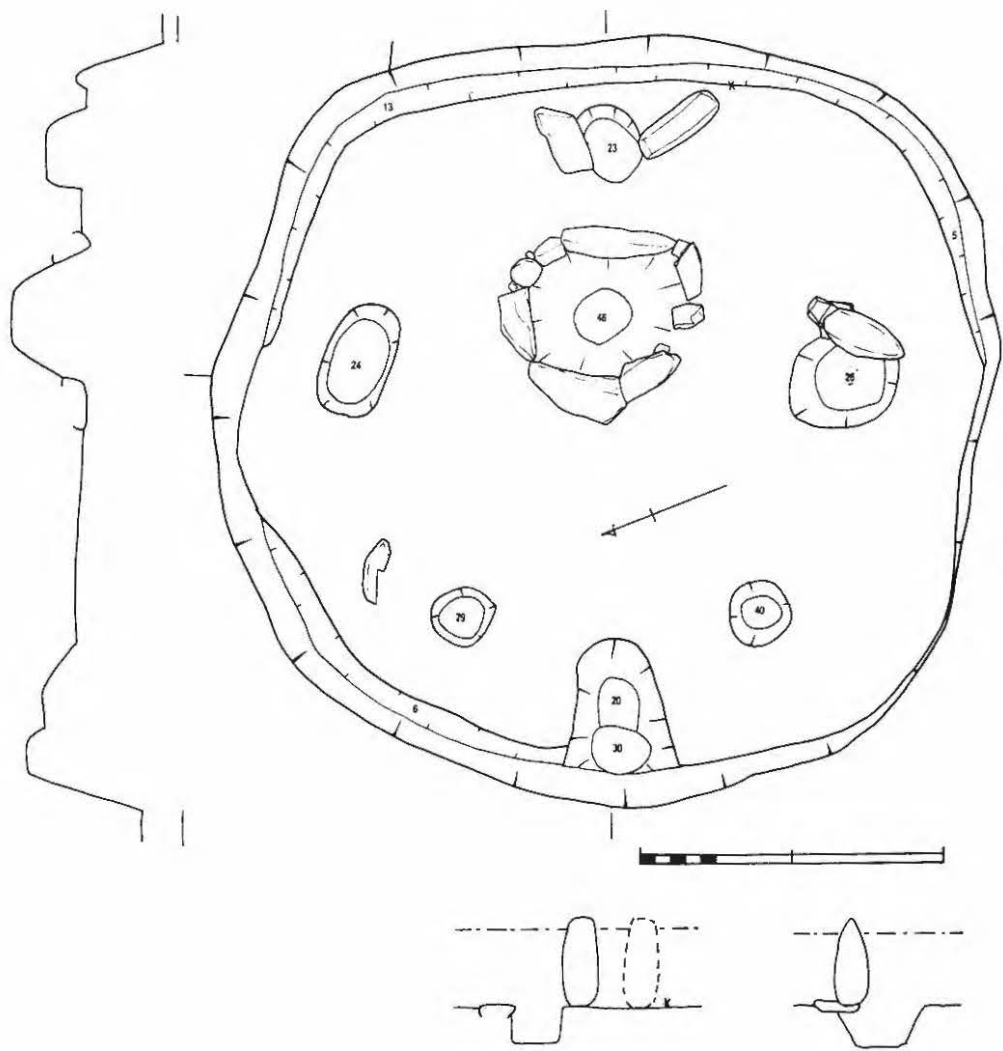
第8图 9号住居址



第9図 10号住居址



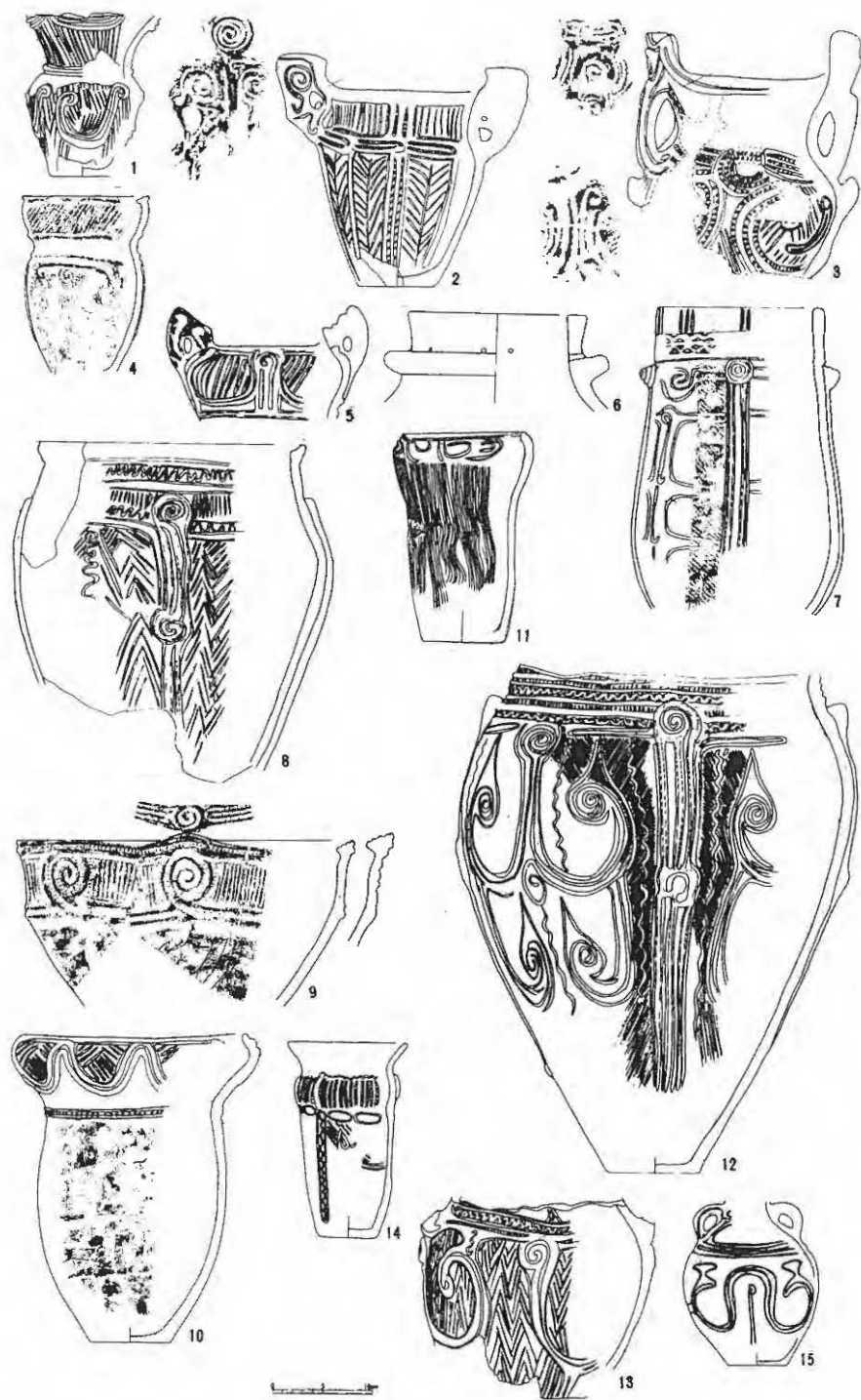
第10図 11号住居址(上)、13号住居址(下)



第11图 12号住居址 (X吊手土器)

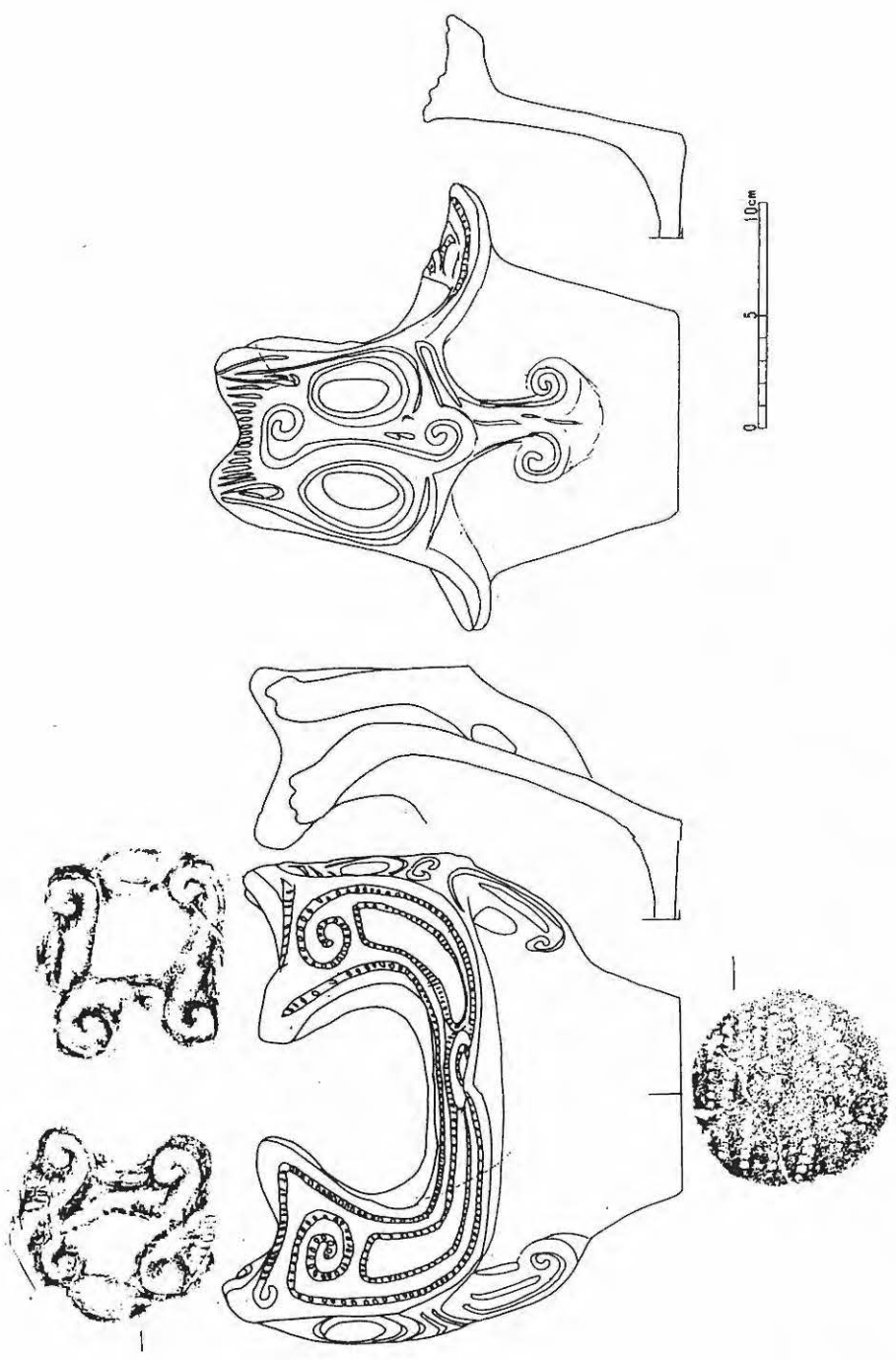


第12図 土 壙



第13图 各住居址出土土器实测图

1. 2 (5住) 3~5 (7住) 7~9 (8住) 10 (9住) 11. 12 (10住)
 13 (11住) 6. 14. 15 (12住)



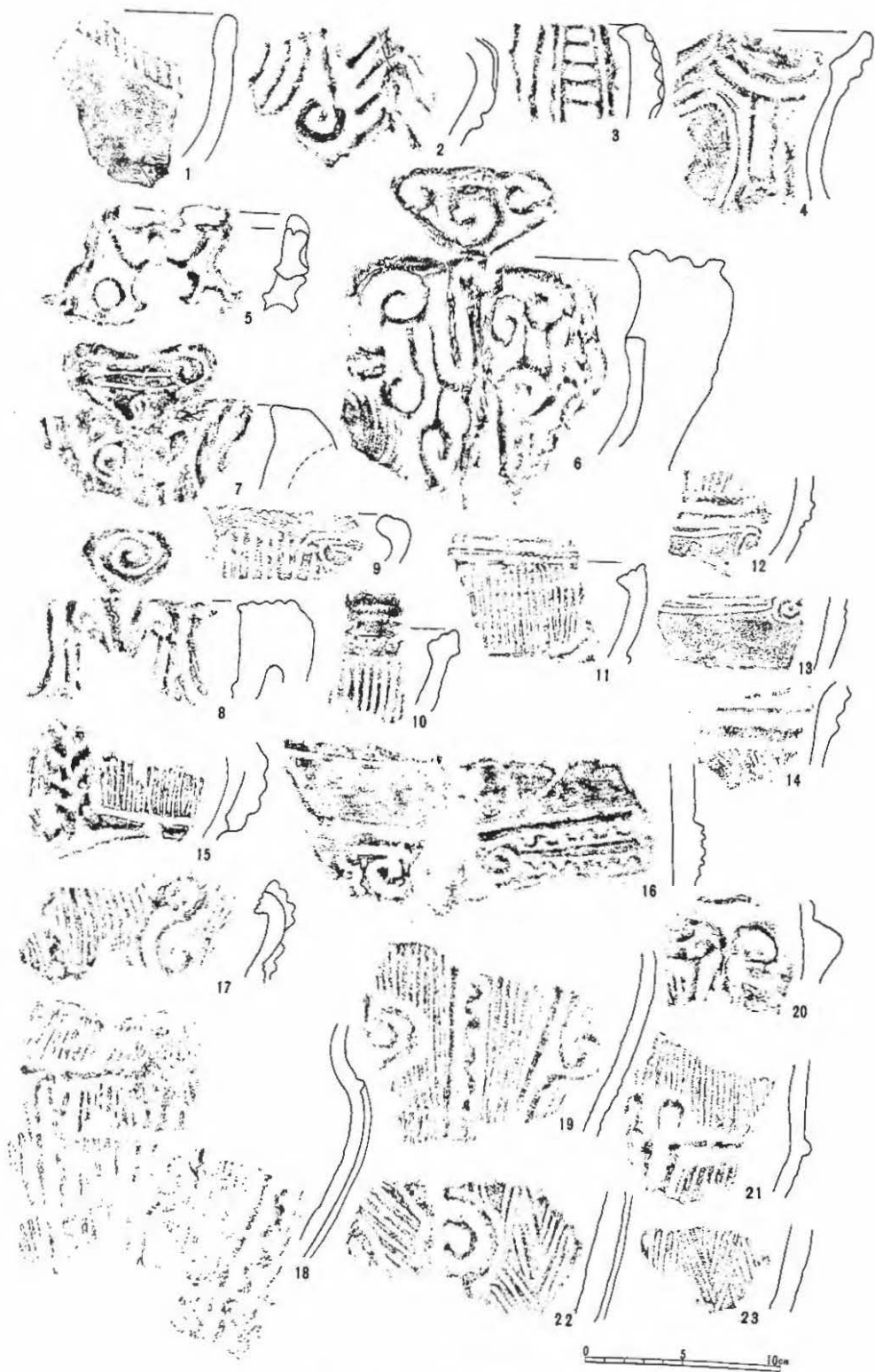
第14图 12号住居址出土吊手土器

第15图 5号住居址出土土器

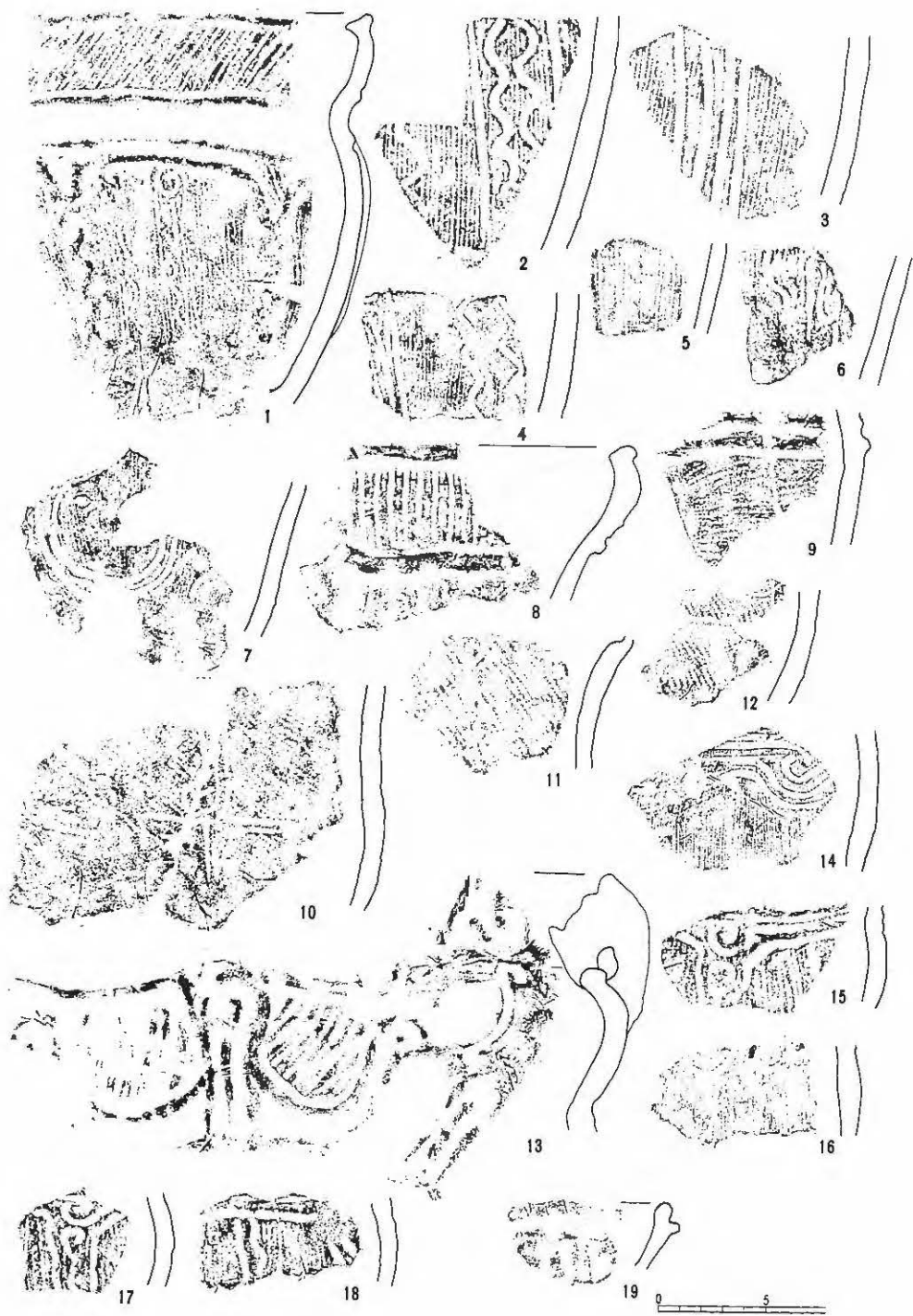




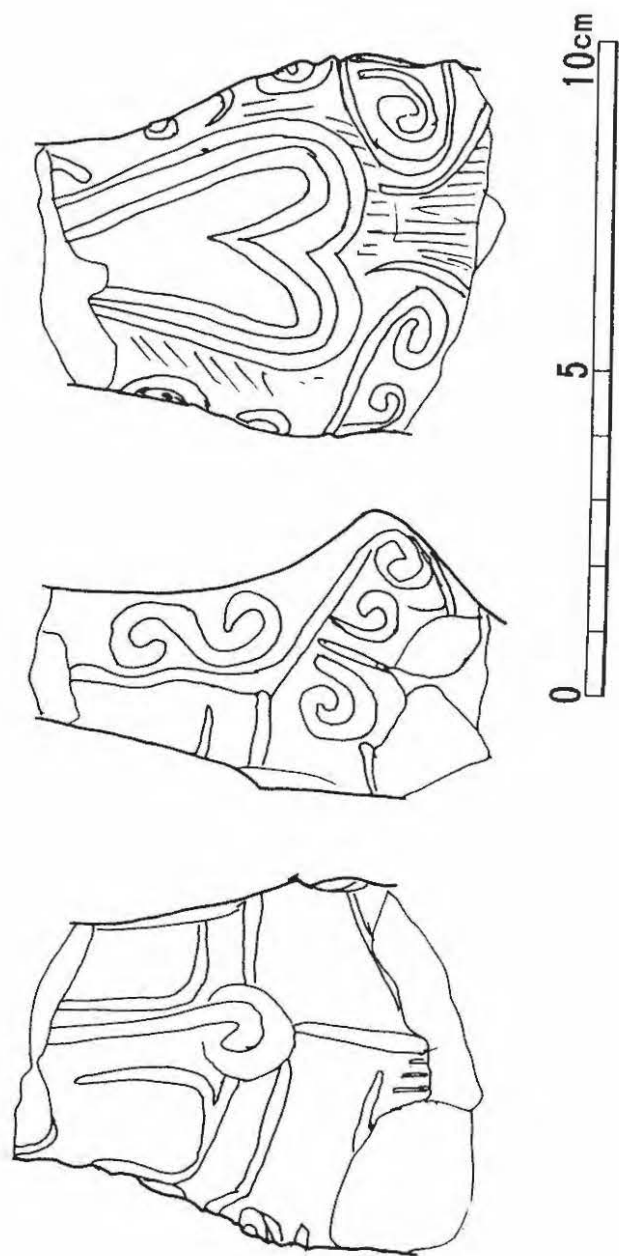
第16图 5 (1~5)、6 (6~29) 号住居址出土土器



第17图 7号住居址出土土器



第18图 7号住居址出土土器

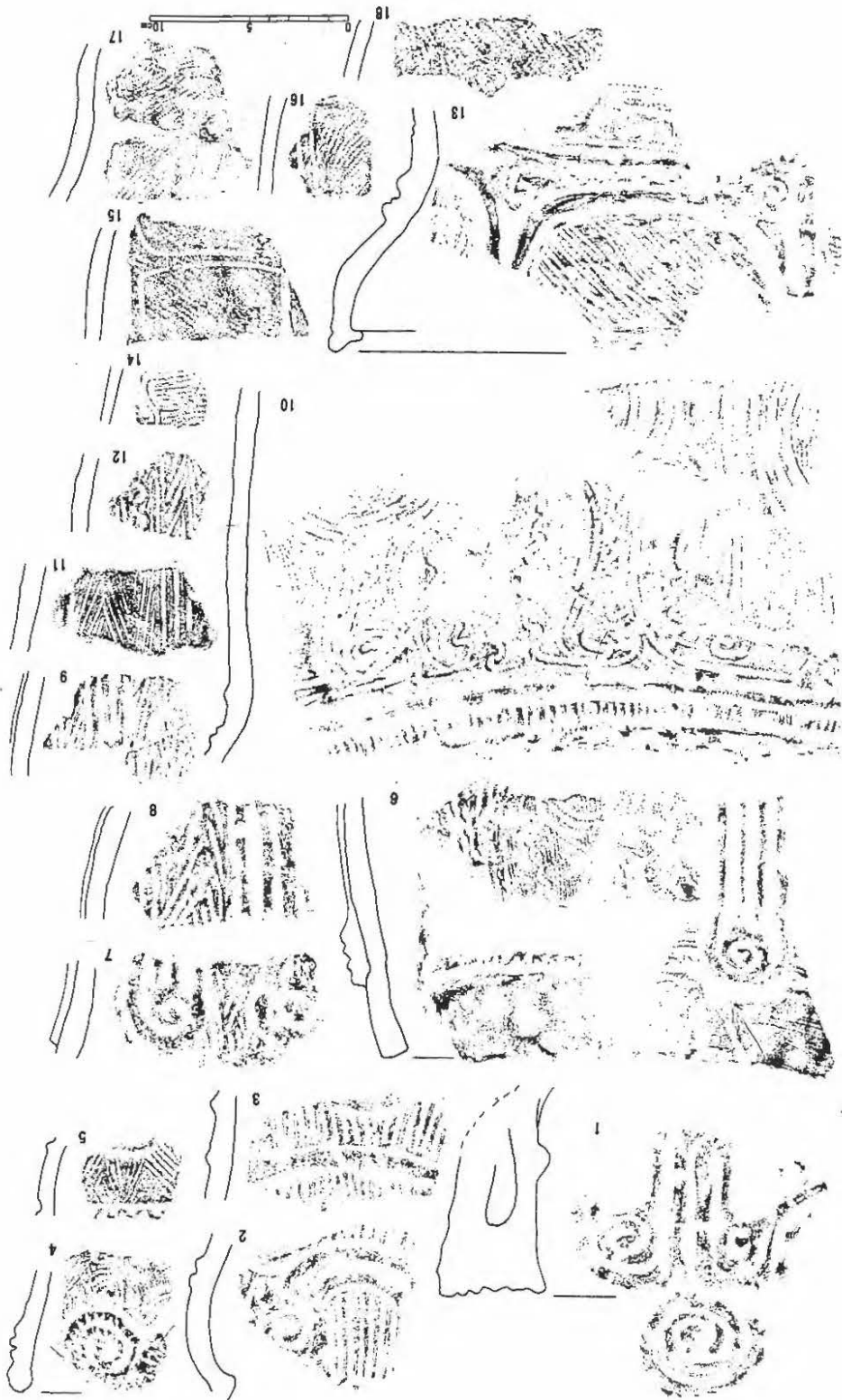


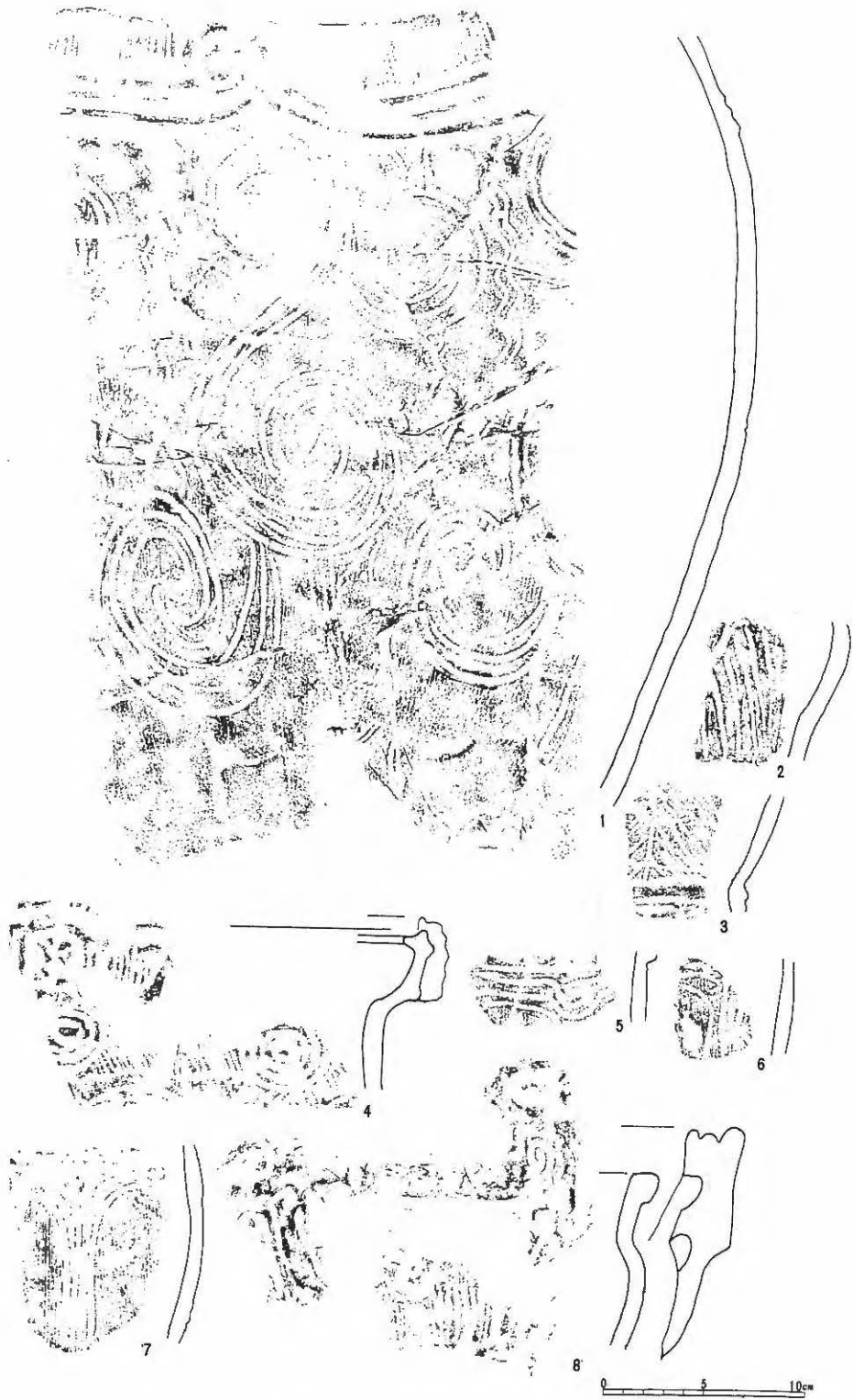
第19图 7号住居址出土土偶



第20图 8号住居址出土土器

第21图 8号住居址出土石器

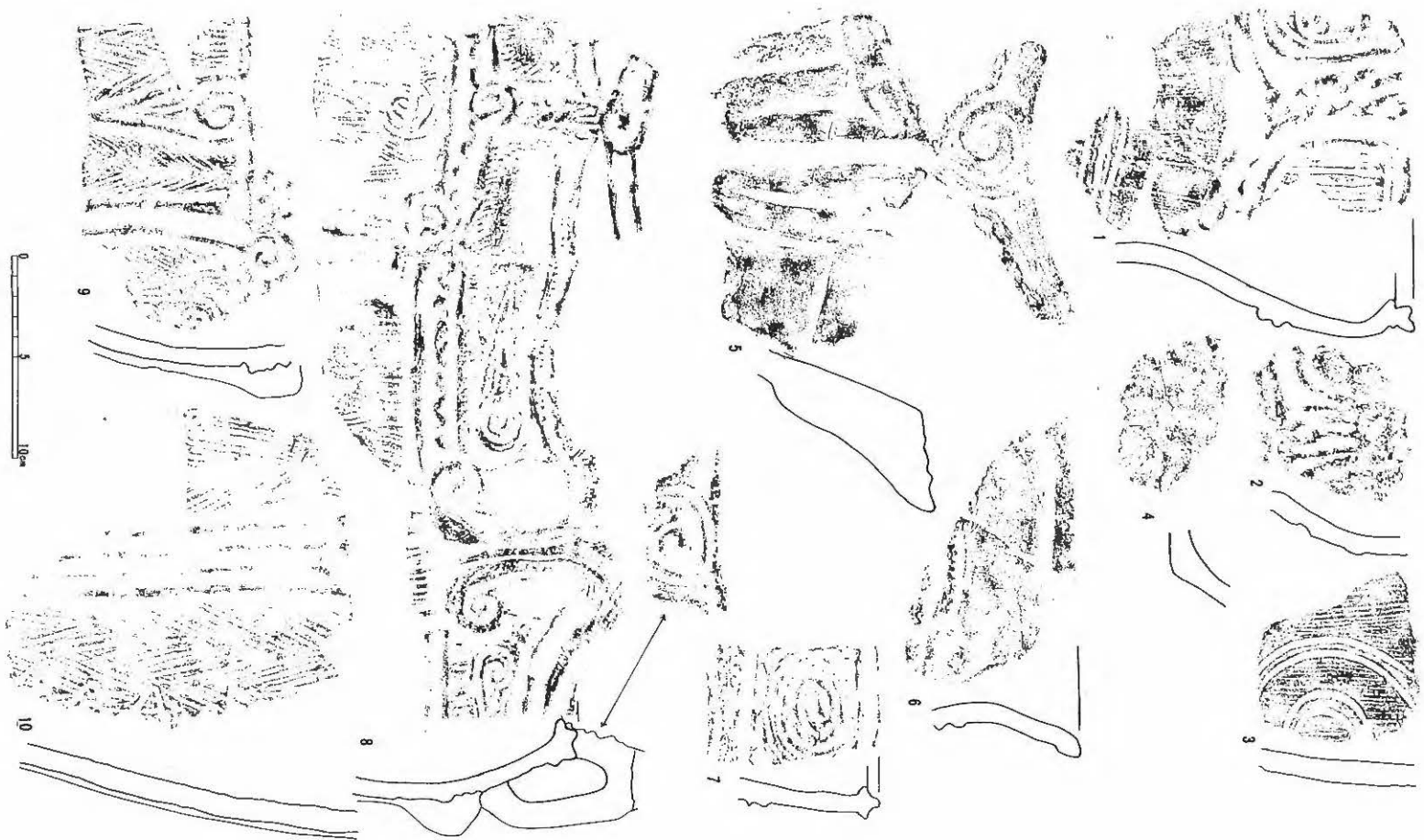




第22图 8号住居址出土土器

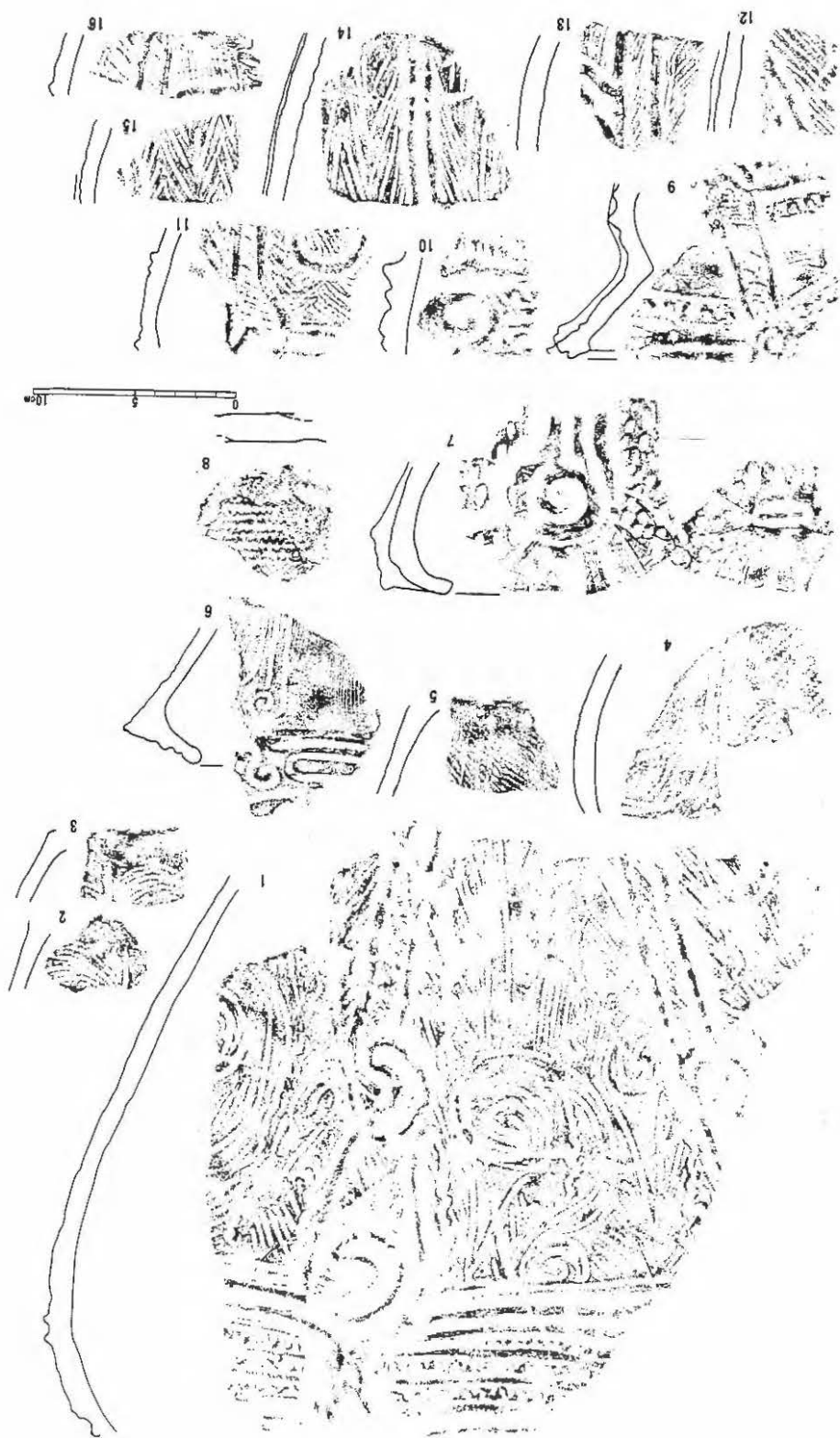


第23图 8 (1~6)、9 (7~15) 号住居址出土土器



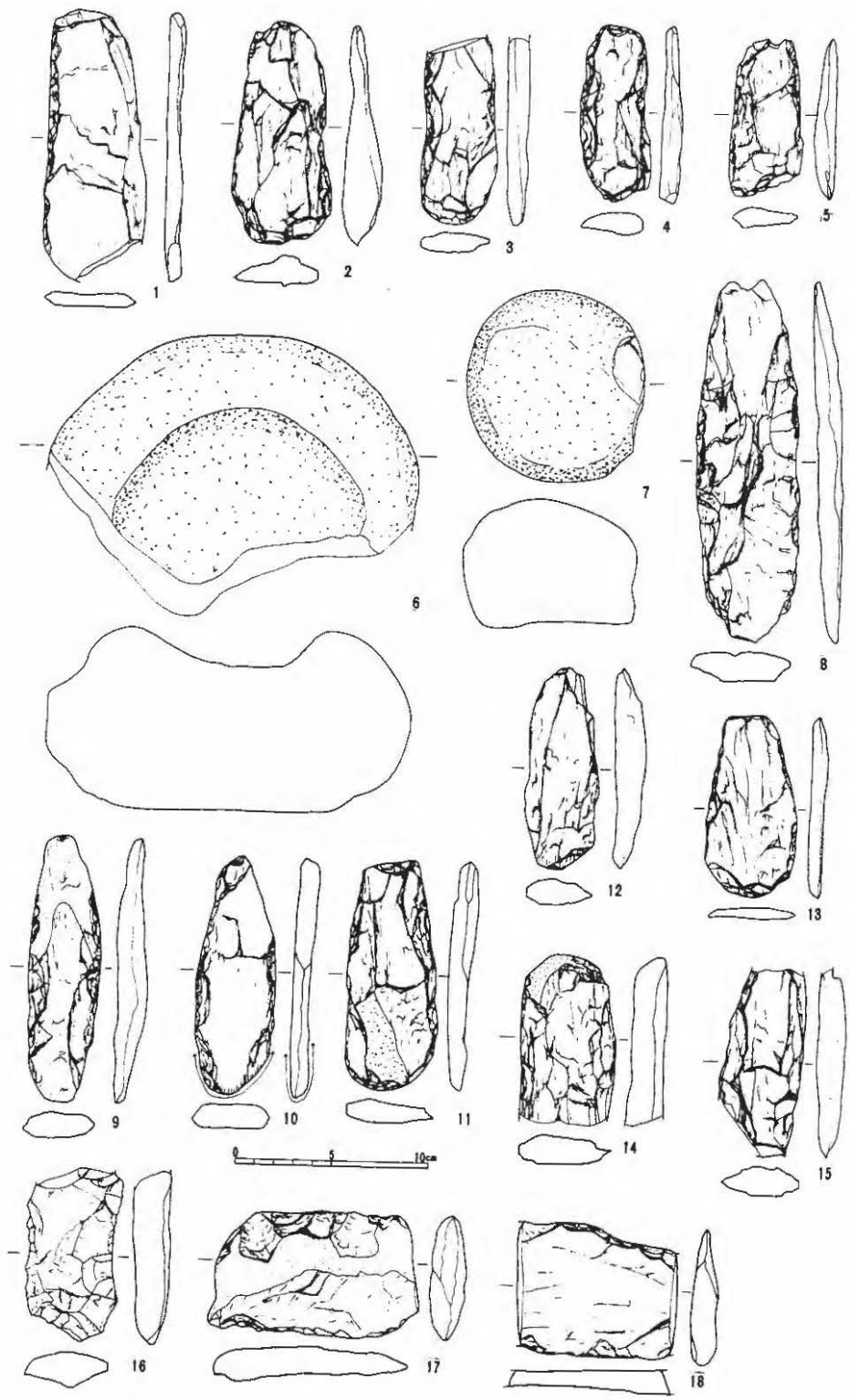
第24图 9 (1~4)、10 (5~10) 号住居址出土土器

第25图 10 (1~8)、11 (9~16) 号住居址出土石器

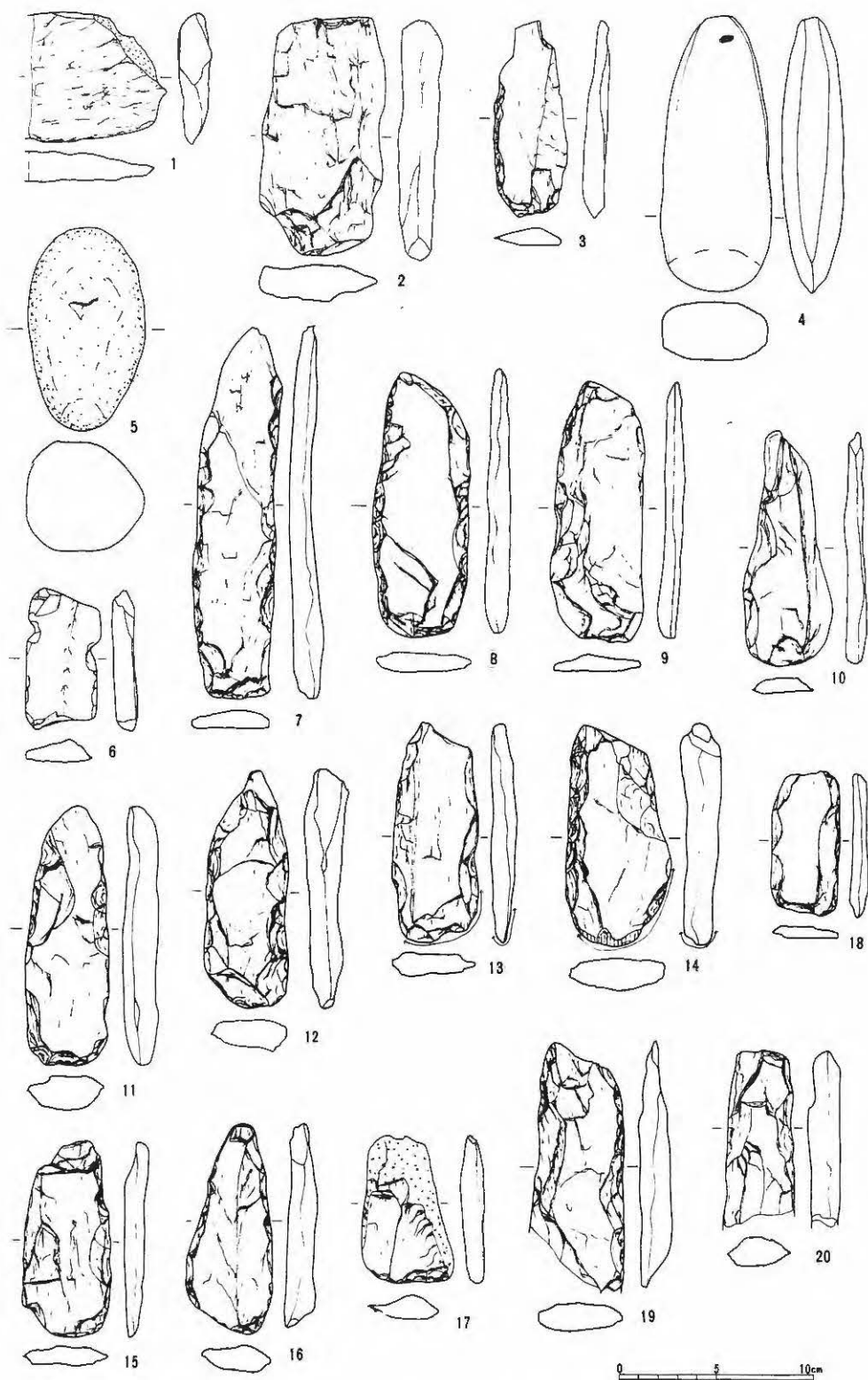


第26图 11 (1~7)、12 (8~13)、13 (14~16) 号住居址出土石器



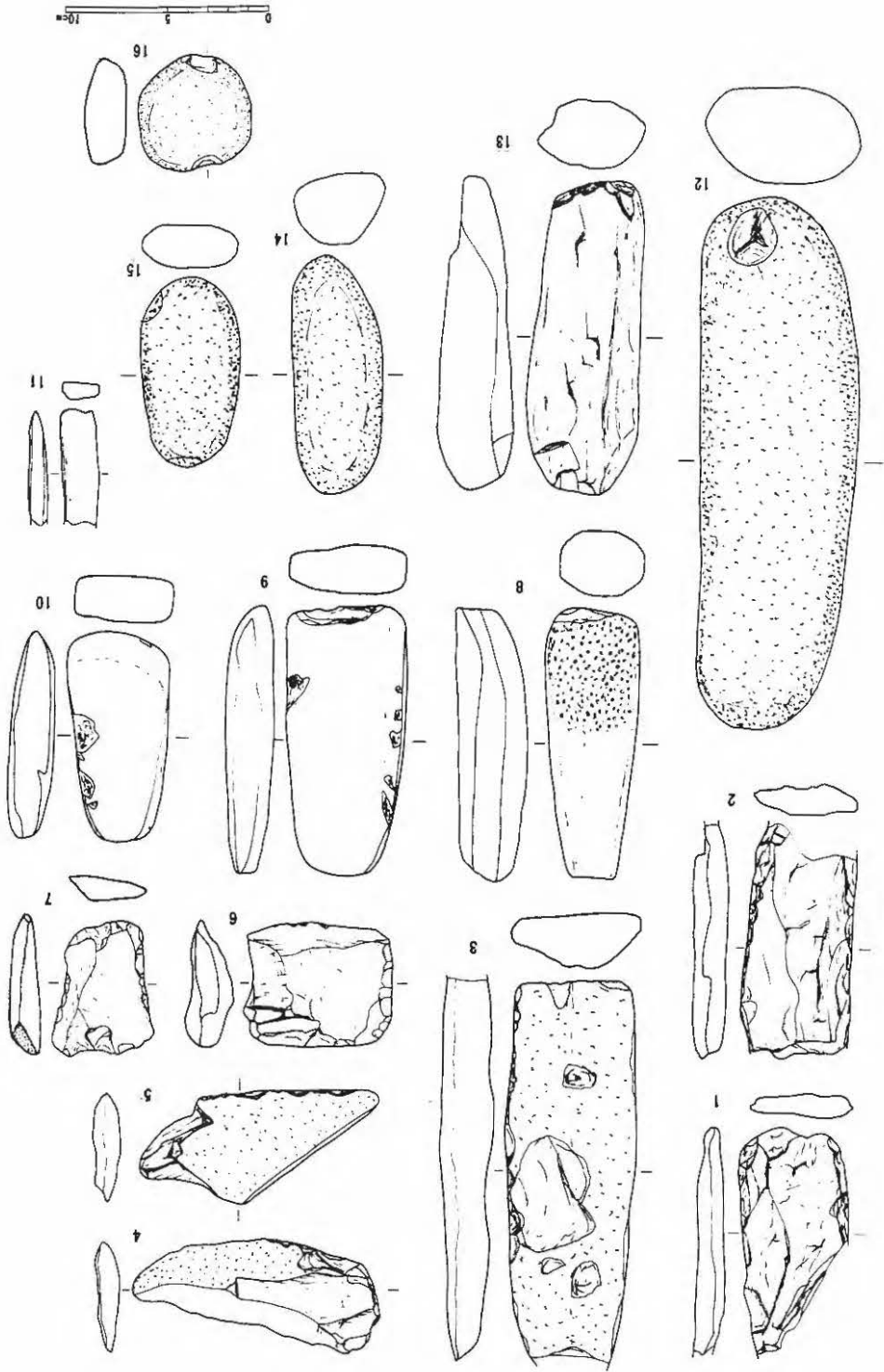


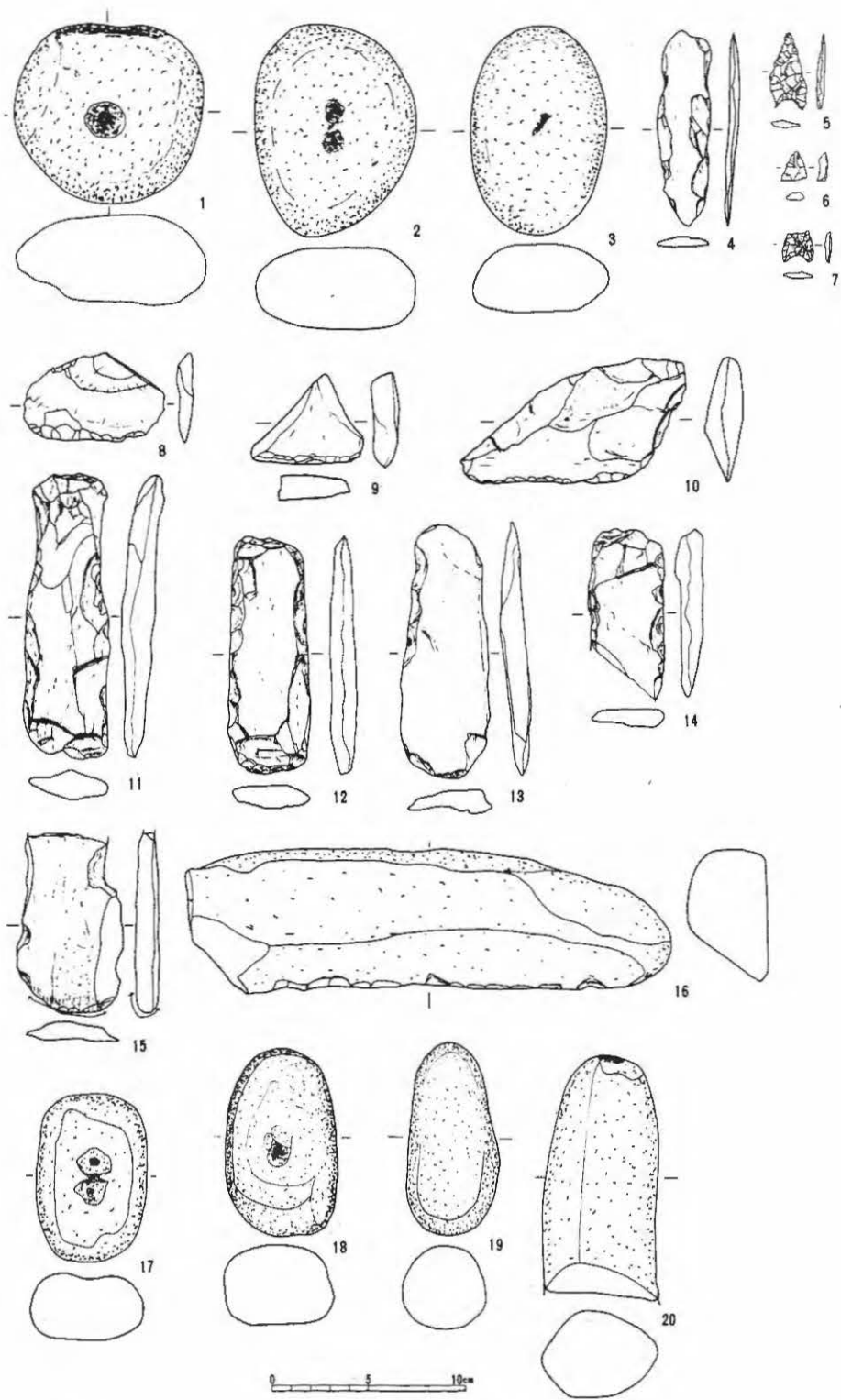
第27图 5 (1~7)、6 (8~18) 号住居址出土石器



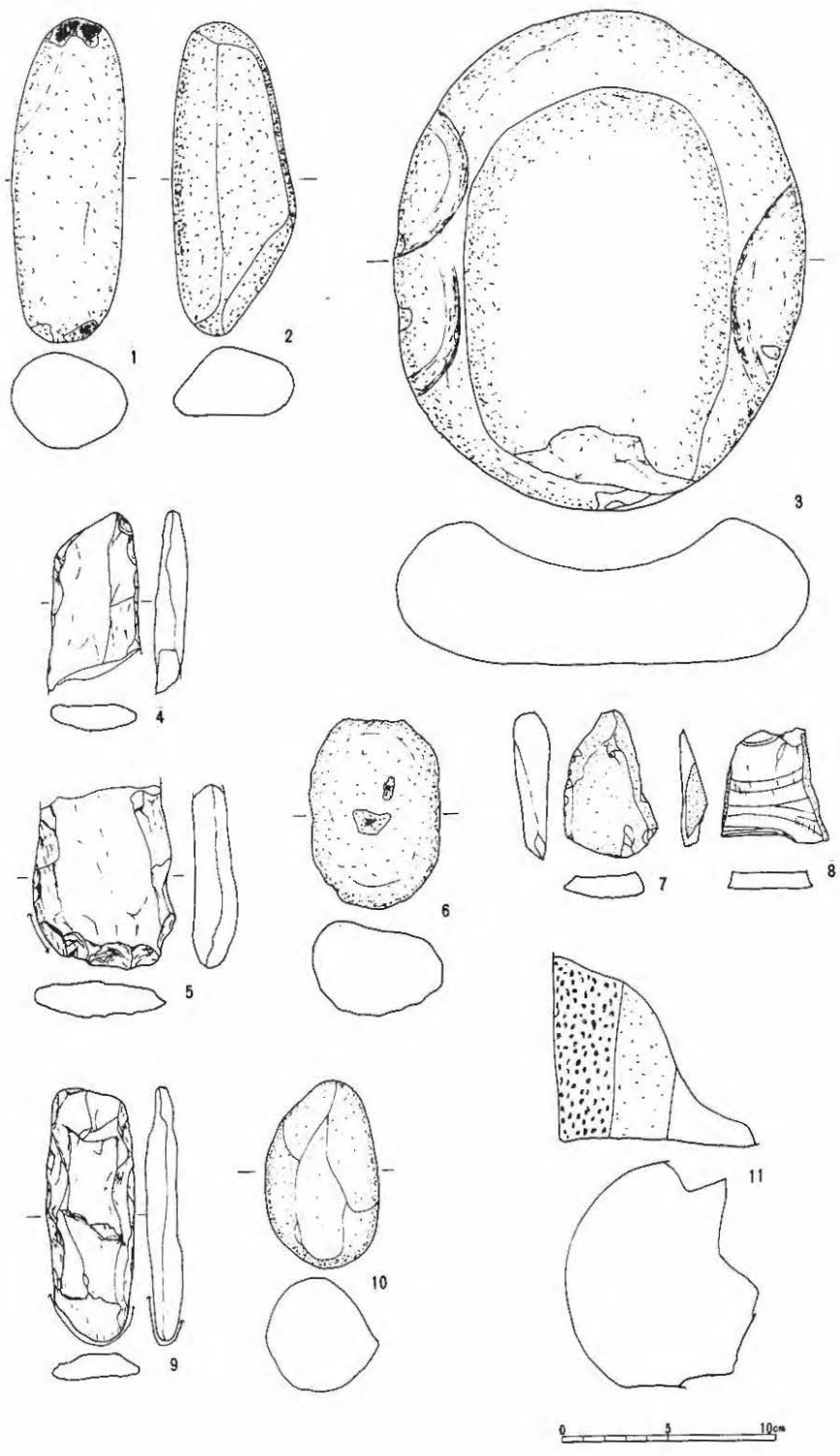
第28图 6 (1~5)、7 (6~20) 号住居址出土石器

第29图 7号住居址出土石器

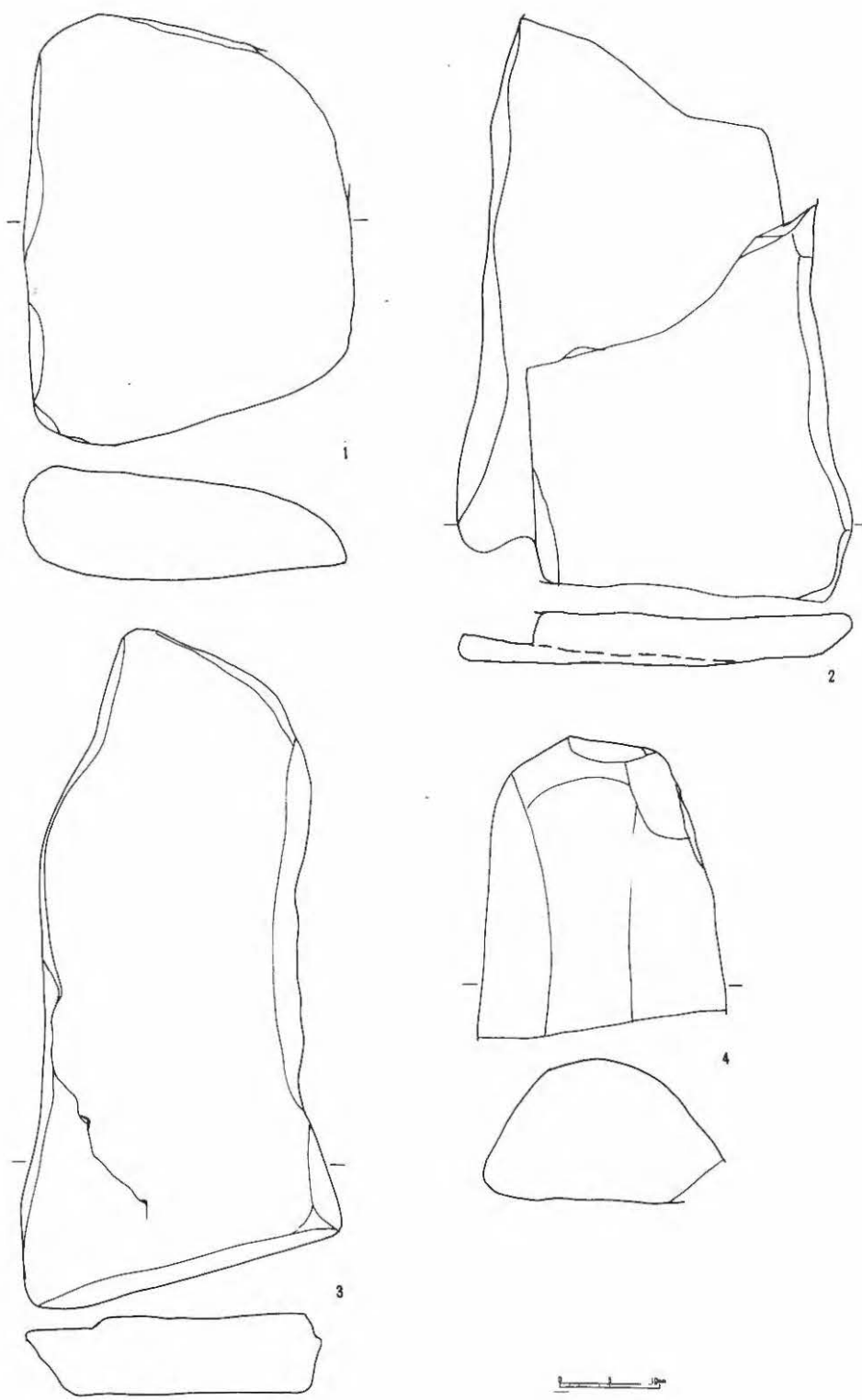




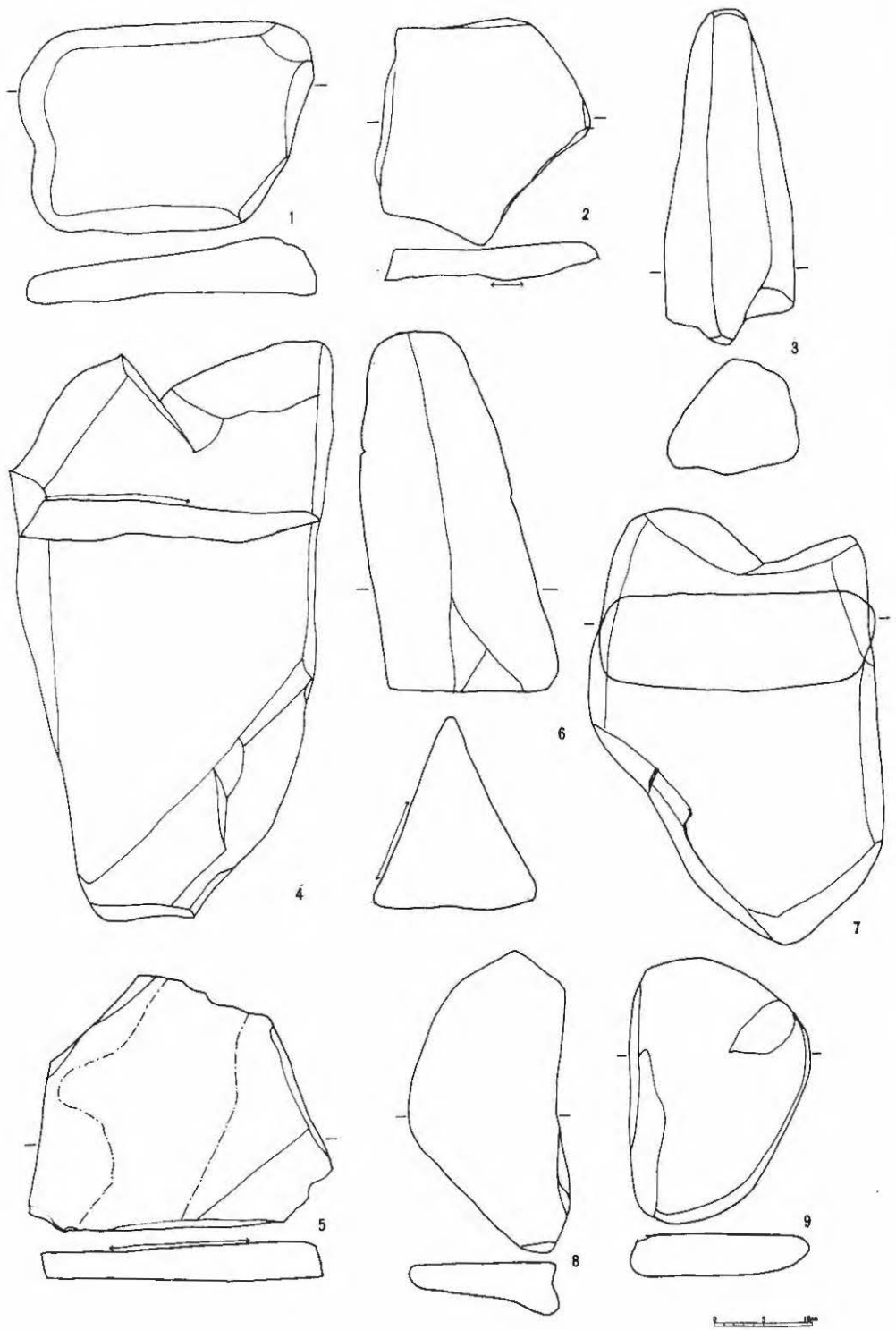
第30图 7 (1~3)、8 (4~20) 号住居址出土石器



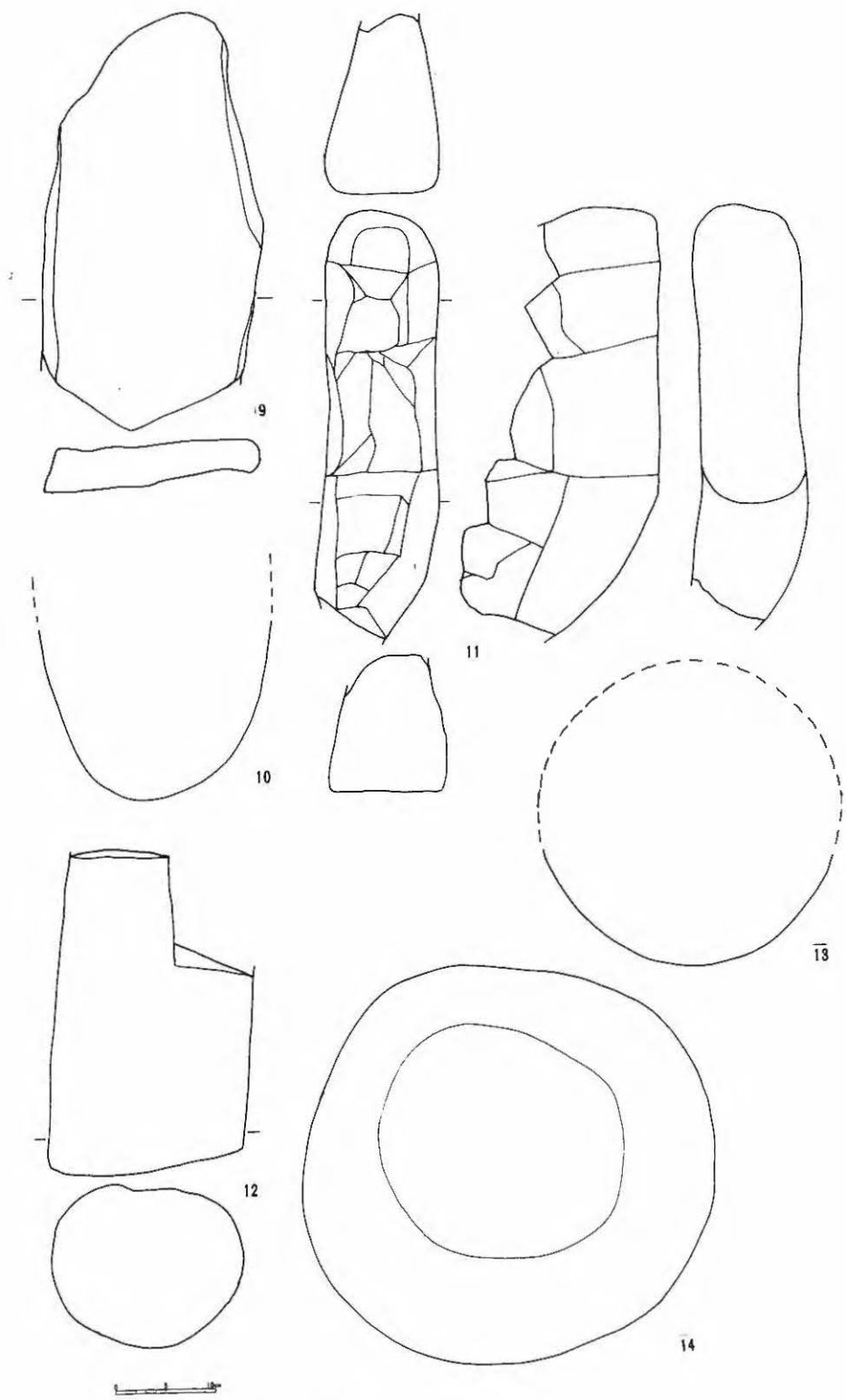
第31图 8 (1. 2)、9 (3~5)、10 (7~10)、13 (11) 号住居址出土石器



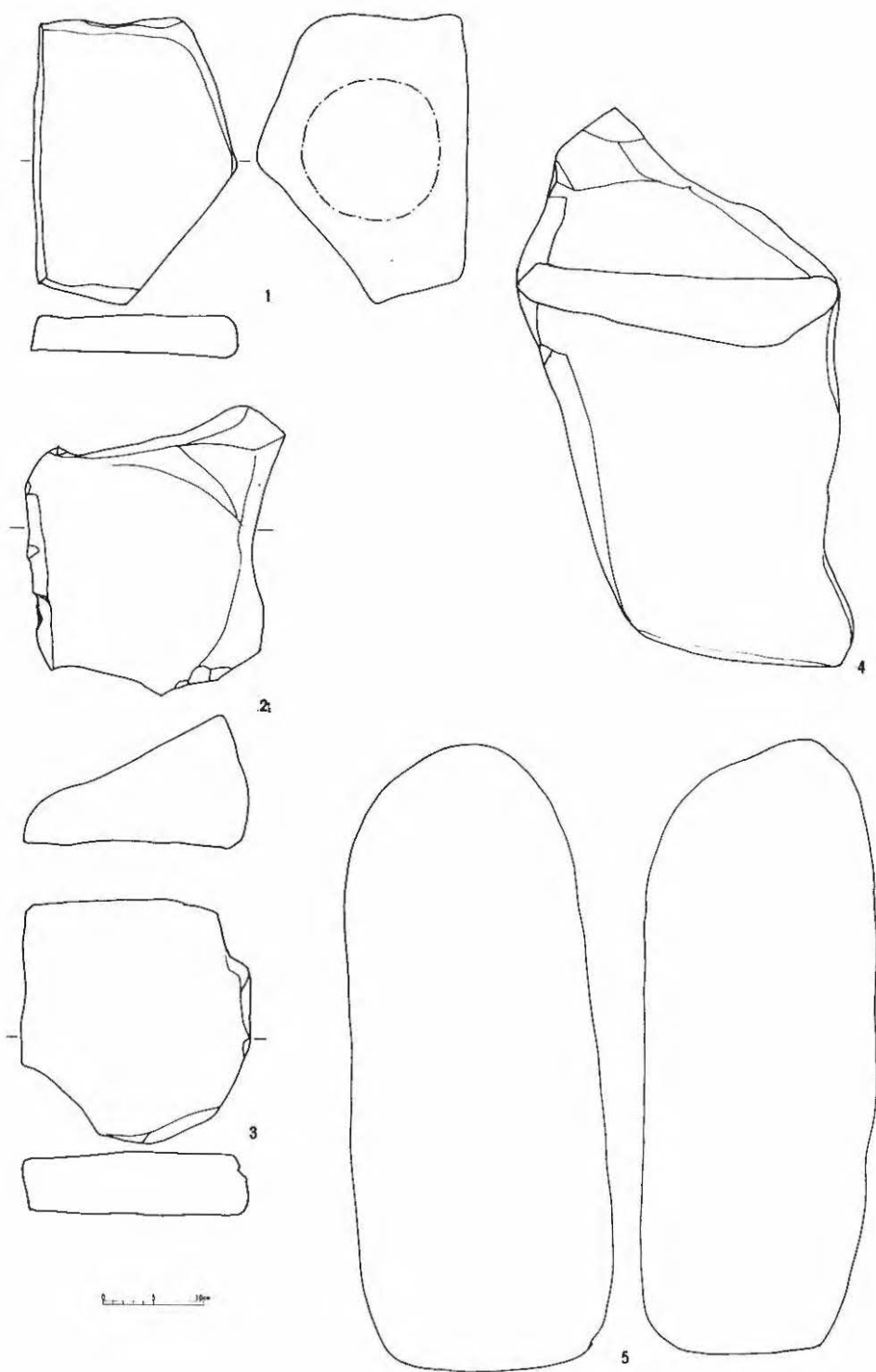
第32图 5号住居址出土台石他



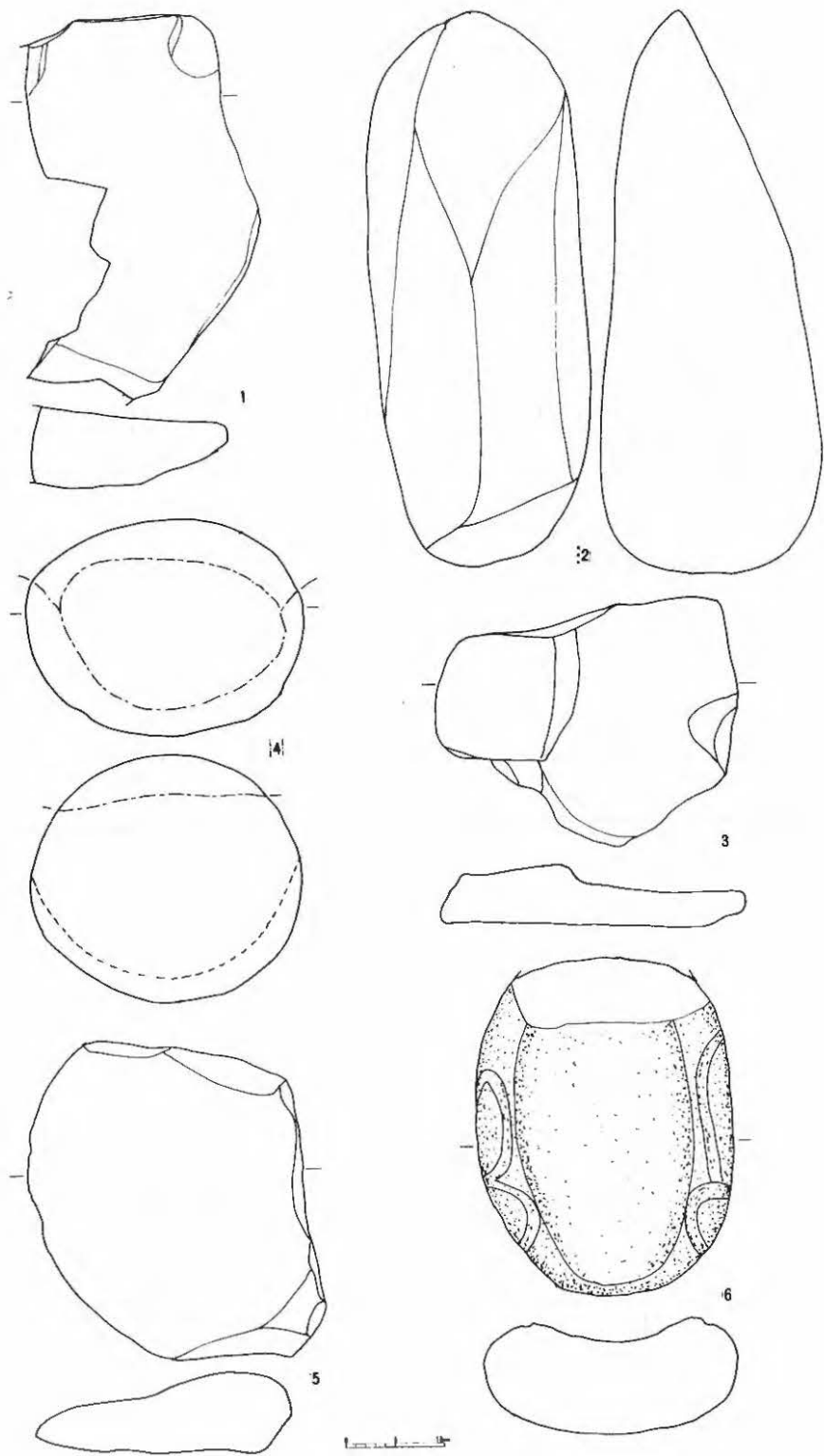
第33图 6 (1)、7 (2)、8 (3)、9 (4~7)、10 (8. 9)号住居址出土台石他



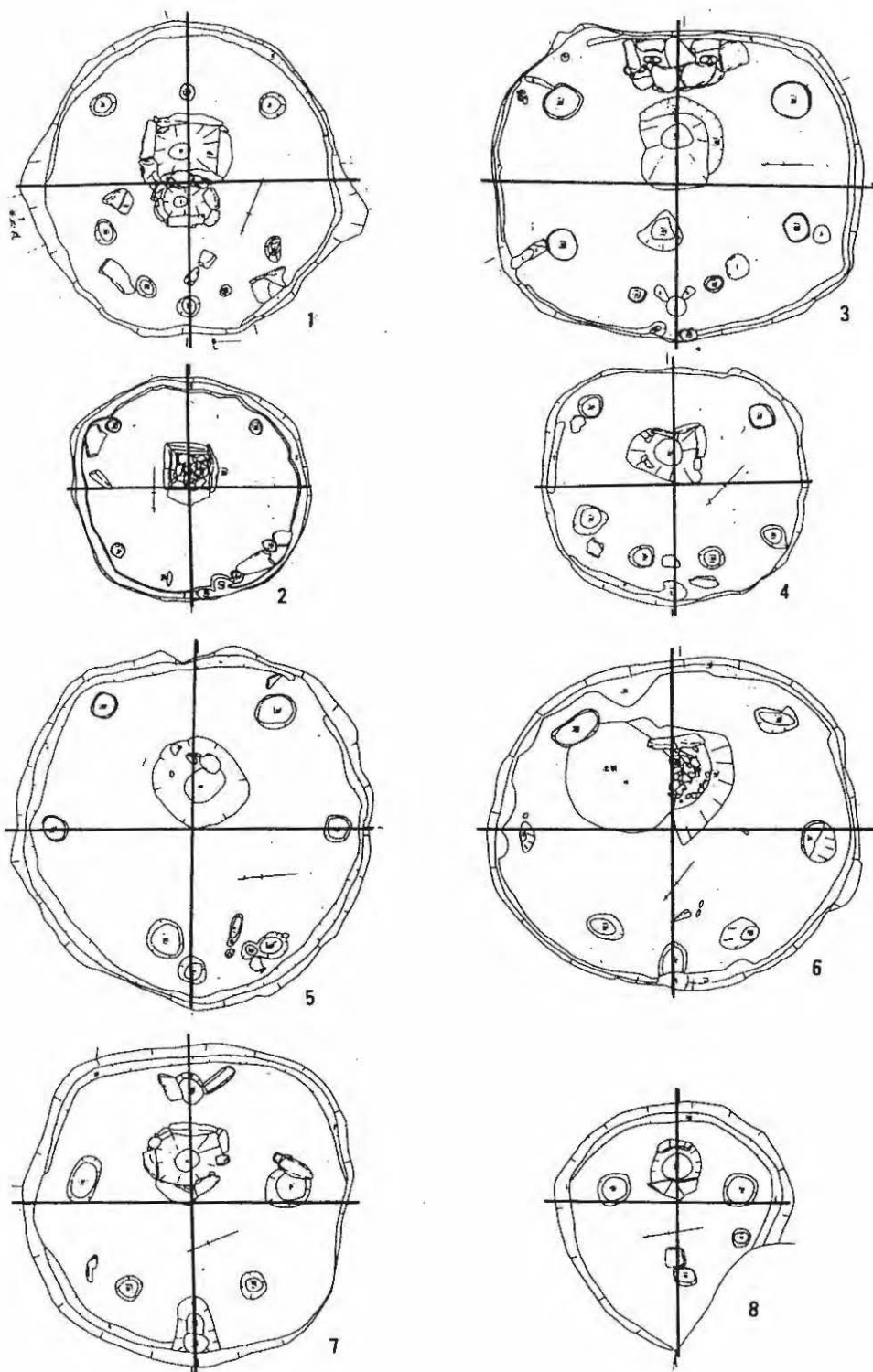
第34图 10号住居址出土石棒他



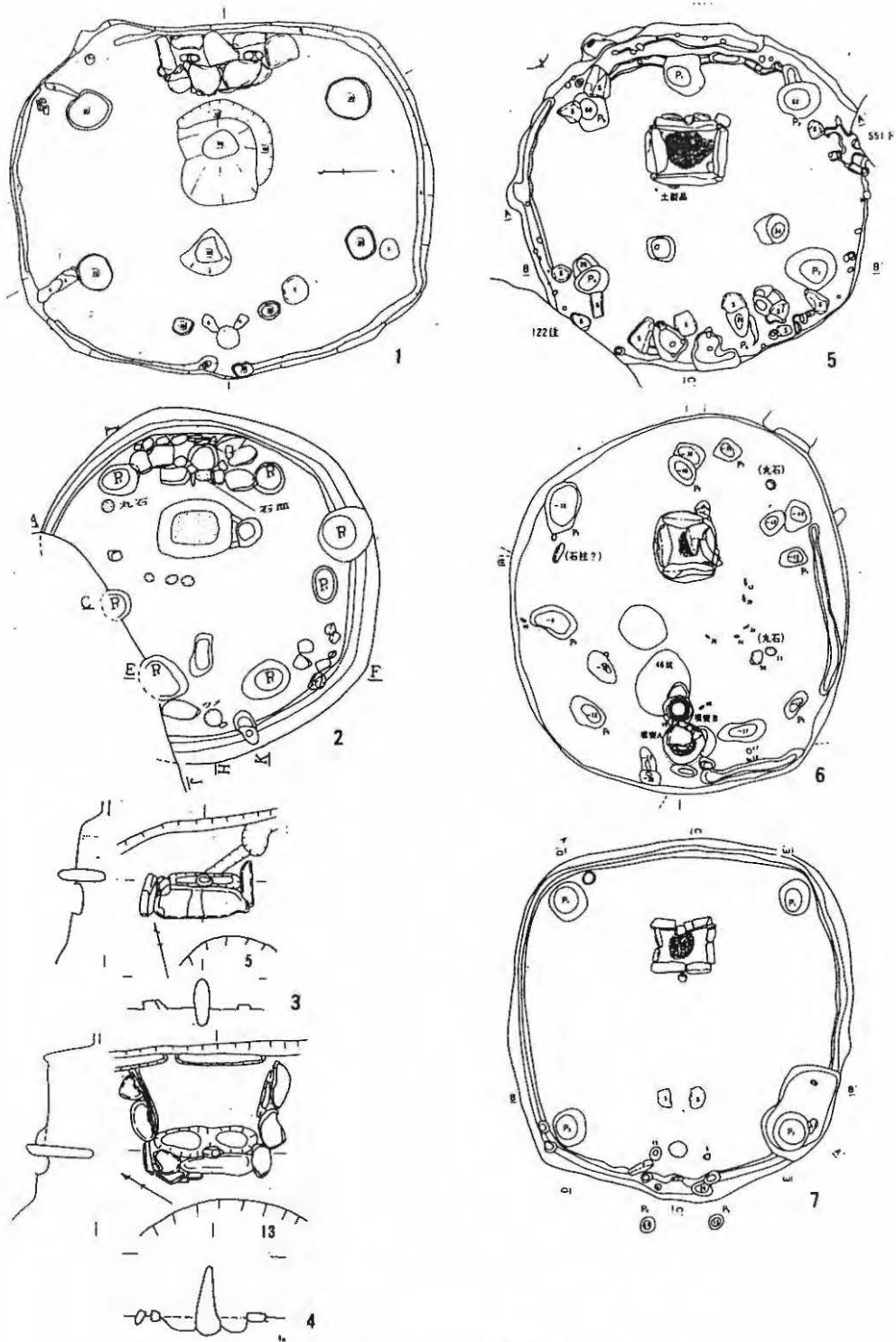
第35図 11 (1~3)、12 (4. 5) 号住居址出土台石他



第36图 12 (1~3)、13 (5) 号住居址、土坑 (6) 出土台石他

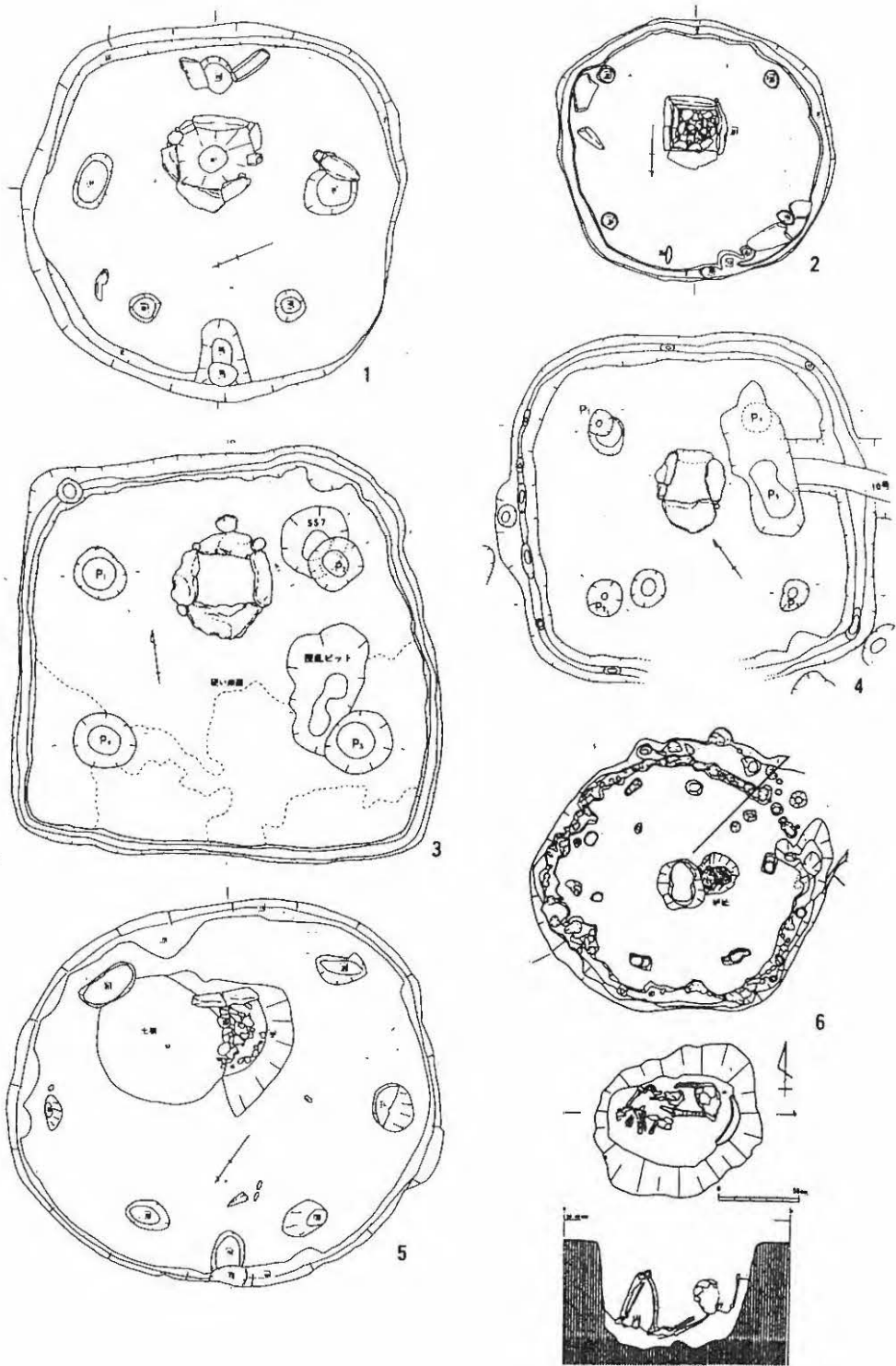


第37図 住居址の規格性 1・2 4本主柱円 3・4 4本主柱扁円
5・6 6本主柱 7・8 2本主柱



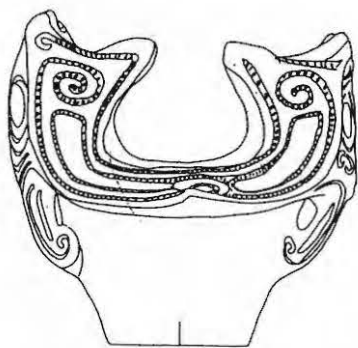
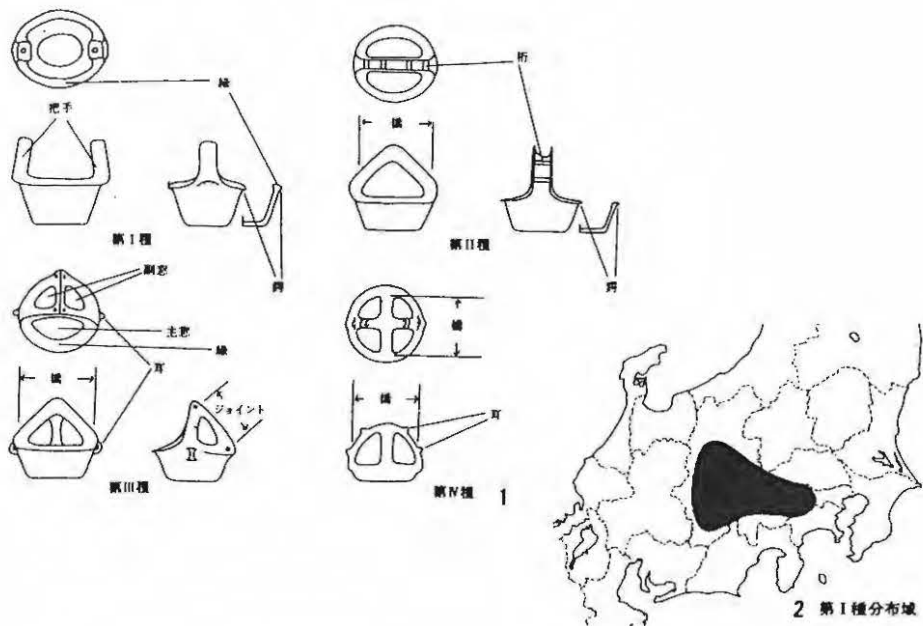
第38図 10号住居址関連遺構

1. お玉の森10号住 2. 反目遺跡4号住 3. マツバリ遺跡5号住 4. 同遺跡13号住
 5. 棚畑遺跡123号住 6. 四日市遺跡23号住 7. 棚畑遺跡2号住

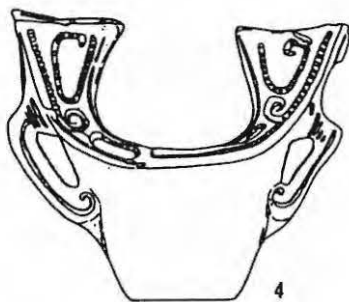


第39図 お玉の森遺跡住居址関連遺構

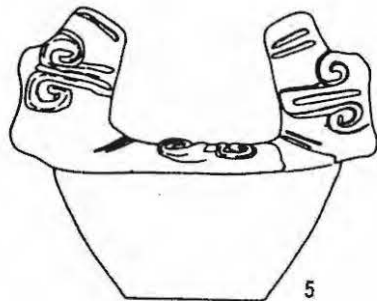
1. お玉の森遺跡12号住 2. 同遺跡9号住 3. 塚原遺跡17号住 4. 同遺跡16号住
 5. お玉の森遺跡8号住 6. 加曾利南遺跡JD16号住



3

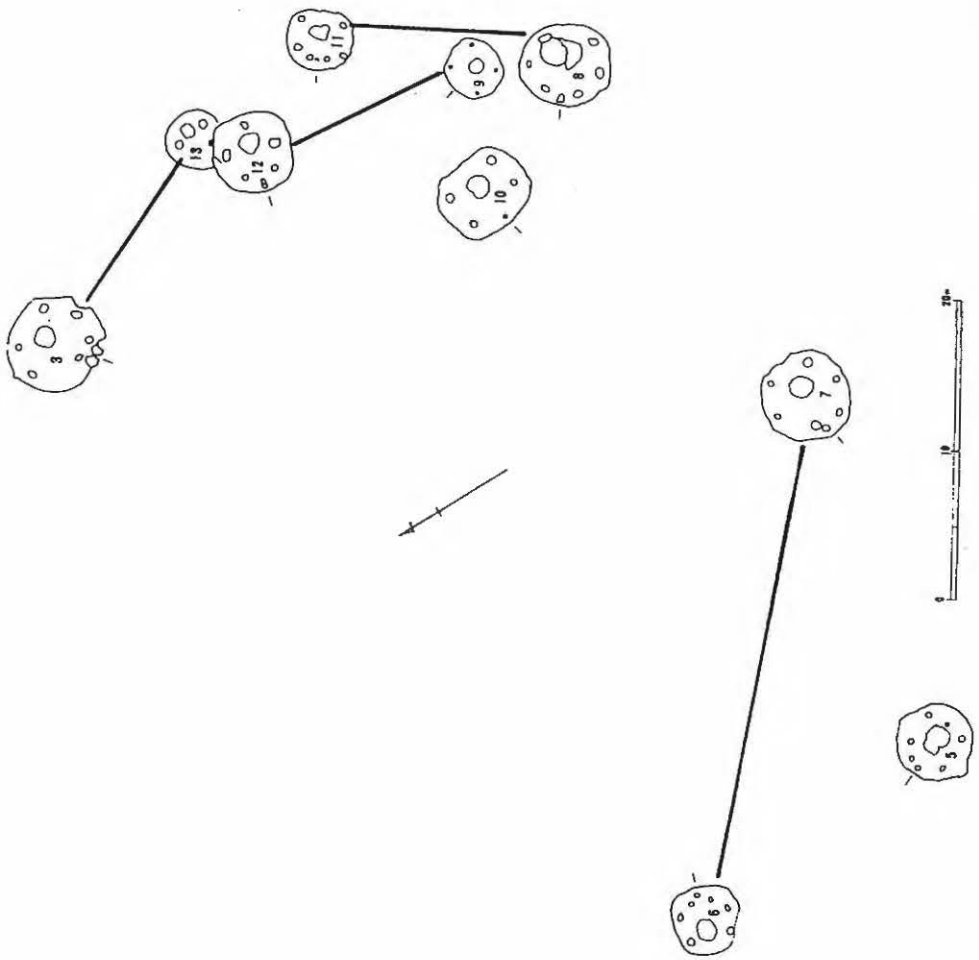


4

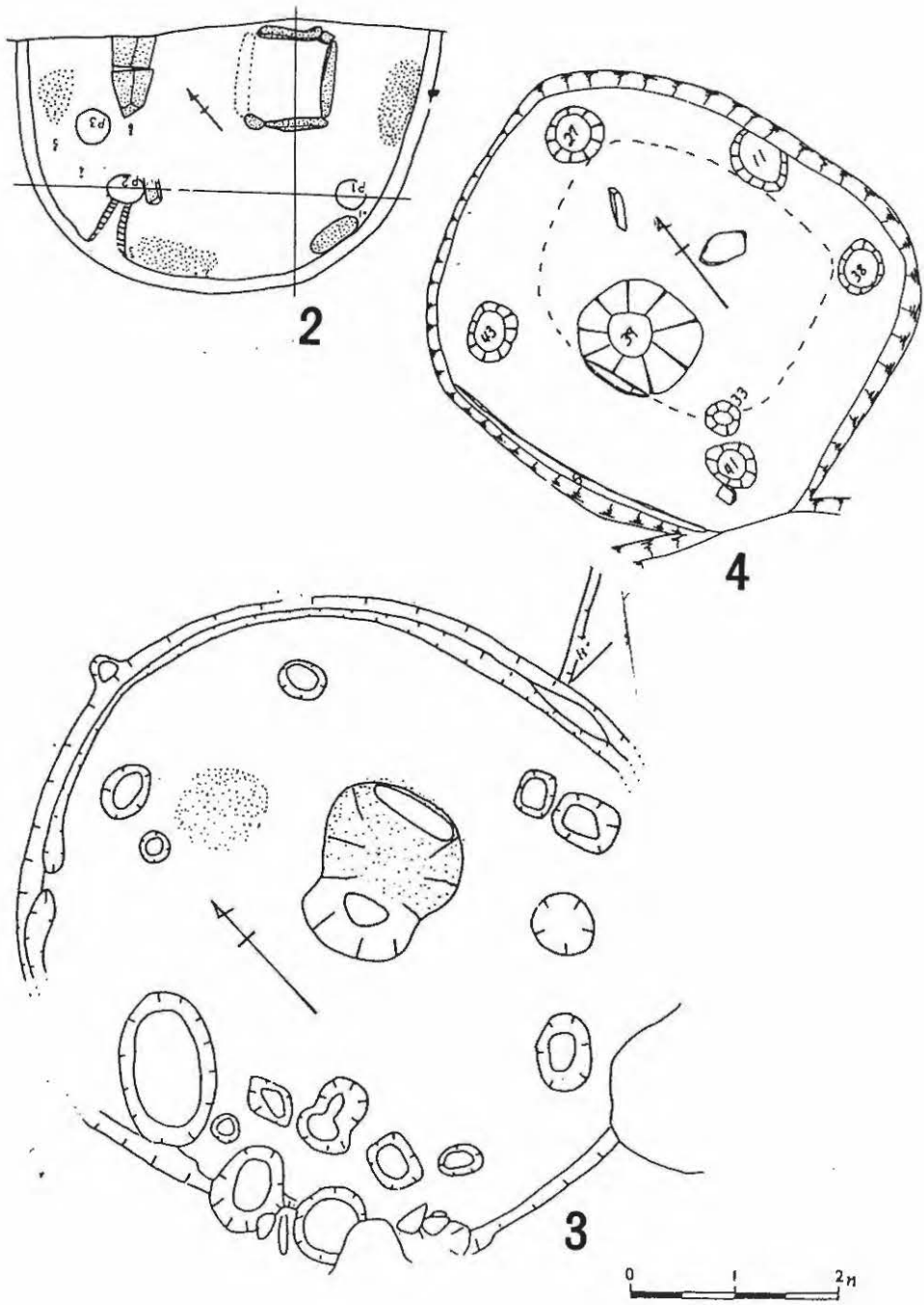


5

第40図 吊手土器関連図 (宮城孝之「縄文時代中期の釣手土器」より)
 1. 吊手土器基本形態と各部名称 2. 第I種分布域 3. お玉の森遺跡
 4. 北高根遺跡 (南箕輪村) 5. 飯坂遺跡 (駒ヶ根市)



第41図 住居址セット関係図



第42図 以前検出住居址 (2~4号)



北方の山吹山より



西方の尾根より



木曾川対岸より



北、上の原より尻平沢川をはさんで



5号住居址（北より）



5号住居址壁断面



旧 炉 と 新 炉



旧 炉 の 炉 隅 の 丸 石



台 石 と 土 器



炉 奥 木 柱



東より



北より



炉

第六図版

7号住居址

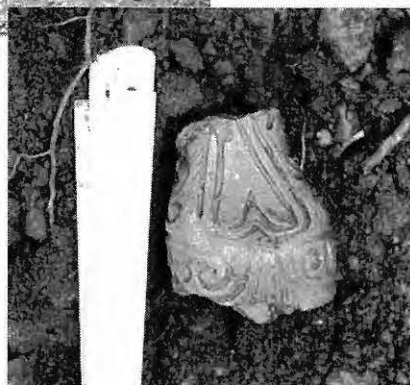


西より



北より

土偶出土状況





西より



東より



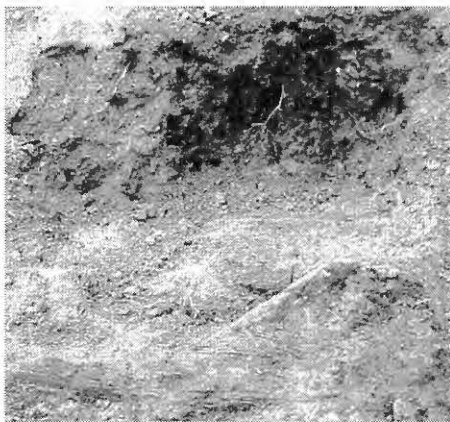
半月形柱穴



西より



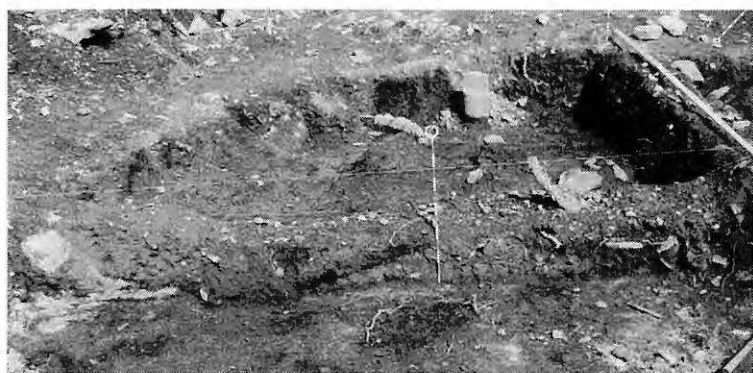
石柱？



炭化材（壁板と柱材）



土器片敷炉



埋土狀況 (西)



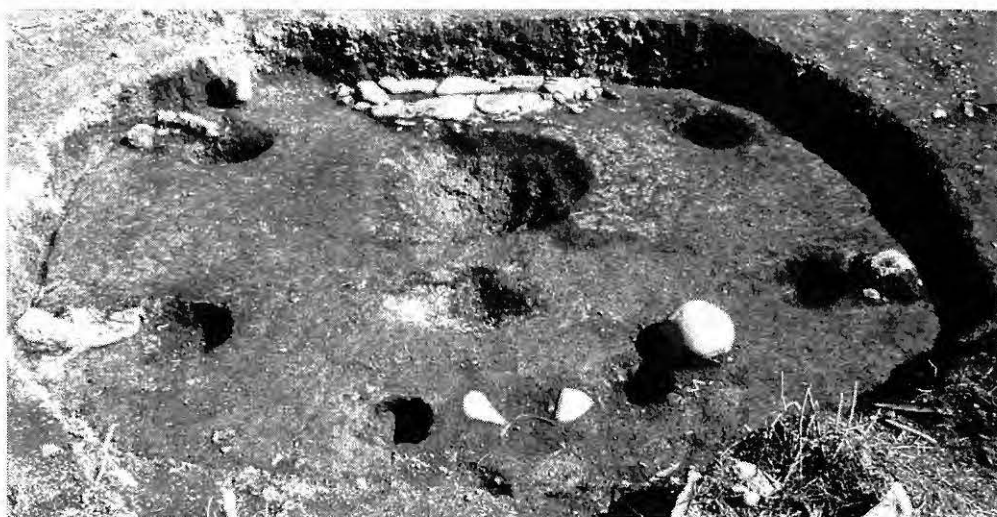
埋土狀況 (東)



壁板



柱穴



人口側（西）から



南
よ
り



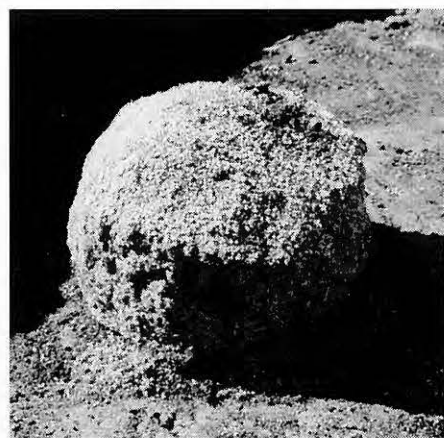
北
よ
り



炉と奥壁



北壁の石柱



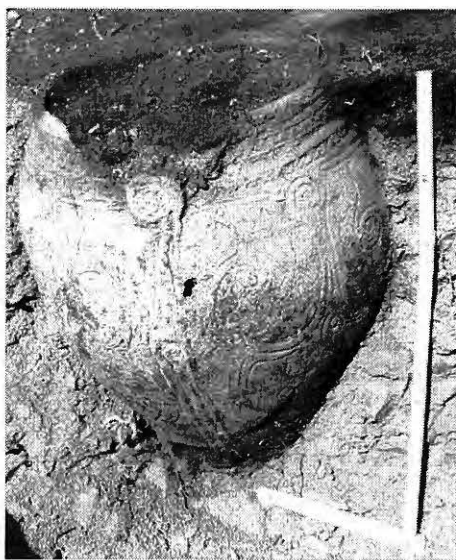
住居内丸石



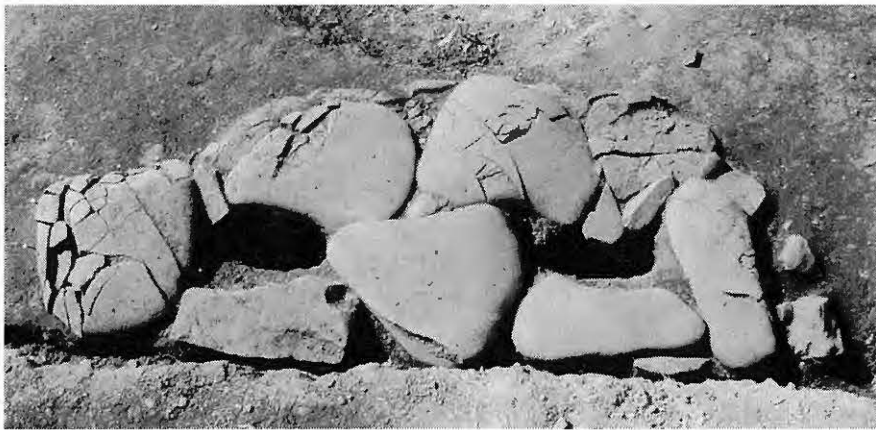
踏石と埋甕



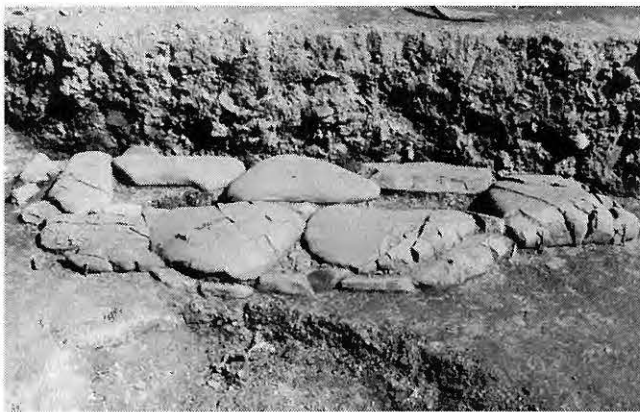
踏石の上にかがんで



埋甕



石壇（東より）



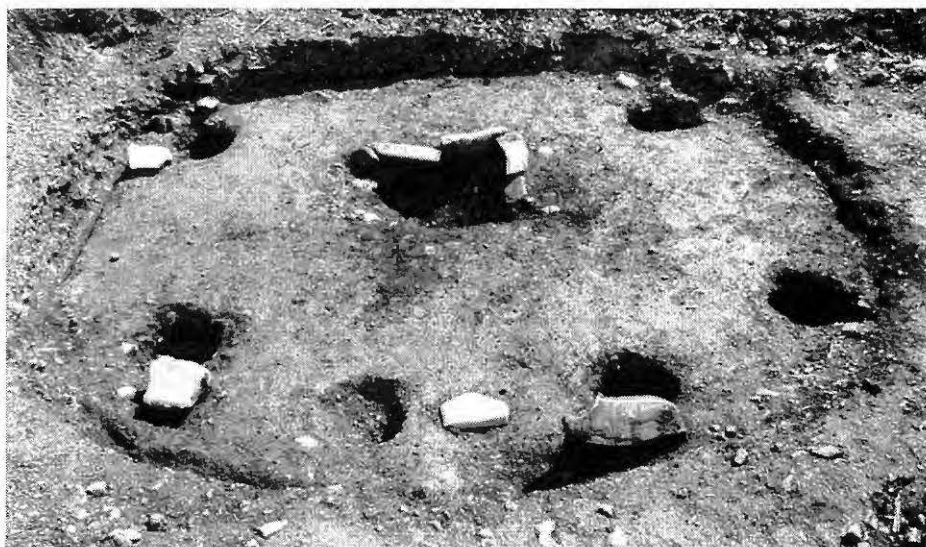
石壇（西より）



石壇（南より）



本柱をたてる



西より

入口部



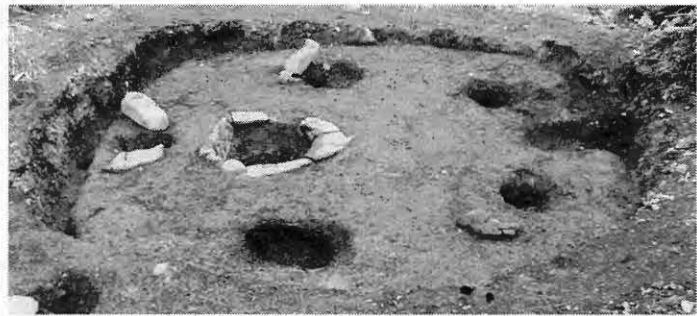
埋 甕





西より

北
よ
り



本柱、石柱をたてる



石 圍 い 炉



炉 隅 の 丸 石



吊手土器出土状況



炉にある土器片



北 よ り



東 よ り



土坑上部（東より）

土
坑
断
面



石皿出土状況



完 掘



5号住居址出土土器



7号住居址出土土器



8号住居址炉敷土器



8号住居址炉敷土器



9号住居址炉敷土器



10号住居址埋甕



10号住居址出土土器



11号住居址埋甕



12号住居址出土土器

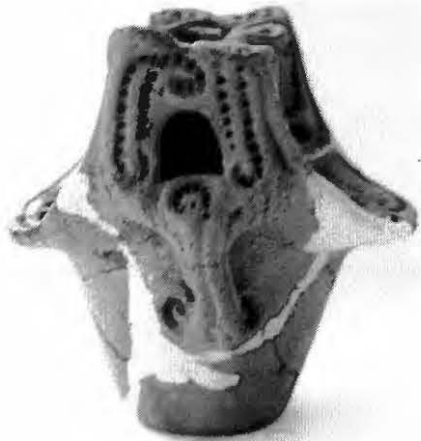
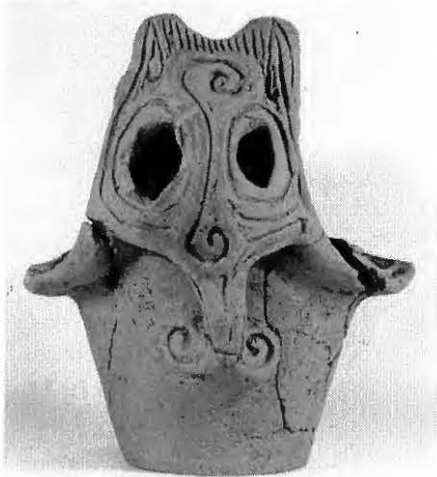


12号住居址出土土器



上伊那郡南箕輪村

北高根遺跡







住居址を中心の調査状況



調査団一同



5号住居址



6号住居址



7号住居址



8号住居址



9号住居址



10号住居址



11号住居址



12・13号住居址



5号住居址



6号住居址



7号住居址



8号住居址



9号住居址



10号住居址



11号住居址



12・13号住居址

報告書抄録

ふりがな	ながのけんきそぐんおだまのもりいせき	
報告書名	長野県木曾郡お玉の森遺跡	
副書名	のむら木材株式会社用地造成事業地内	
シリーズ名	日義村の文化財	
シリーズ番号	12	
著者名	神村 透	
編集機関	日義村教育委員会	
所在地	〒399-6101 長野県木曾郡日義村1600-1	
発行年月日	1998年3月20日	
遺跡名	お玉の森遺跡(日義村1777)	
遺跡番号	29-135	
北緯	35° 52' 40"	
東経	137° 45' 50"	
調査期間	1996年10月1日～10月29日	
調査面積	3,000㎡	
調査原因	新規事業に伴う用地造成	
調査結果	時代	縄文時代中期後半
	遺構	縦穴住居址9、土塼1
	主な遺物	縄文中期後半土器と石器
	特記事項	石壇のある住居址 完形吊手土器

日義村の文化財（調査報告書）

- 1 『御霊森遺跡発掘調査報告書』（昭和51年3月）
（日義学校配水池築造に伴う緊急発掘調査報告書）
- 2 『長野県木曾郡お玉の森遺跡——平安時代後半の集落』（昭和52年3月）
（日義中学校体育館・駐車場建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 3 『上の原遺跡』（昭和53年2月）
（通常砂防事業取付道路に伴う緊急発掘調査報告書）
- 4 『上の原遺跡——平安時代小鍛冶住居址』（昭和54年3月）
（中部電力電柱置場造成に伴う緊急発掘調査報告書）
- 5 『長野県木曾郡お玉の森遺跡——平安時代後半の集落』（昭和56年3月）
（日義小中学校給食施設建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 6 『長野県木曾郡お玉の森遺跡——平安時代後半の集落』（昭和58年8月）
（日義村庭球場建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 7 『長野県木曾郡宮の原（元原）遺跡——中世遺跡』（昭和61年3月）
（工場用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告書）
- 8 『日義村の石造文化財』（平成元年3月）
- 9 『長野県木曾郡お玉の森遺跡（第8次調査）』（平成3年3月）
（建設省除雪センター建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 10 『元原遺跡——室町期富裕農民屋敷跡』（平成6年9月）
（木曾農協原野出張所建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 11 『マツバリ遺跡——木曾谷の縄文中期拠点集落』（平成7年3月）
（日義村在家地区圍場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書）
- 12 『長野県木曾郡お玉の森遺跡』
（のむら木材株式会社用地造成に伴う緊急発掘調査報告書）

日義村の文化財 12

**長野県木曾郡 お玉の森遺跡
(第9次調査)**

発行日 平成 10 年 3 月 20 日

発行者 日義村教育委員会
長野県木曾郡日義村1600-1

印刷所 トキワ印刷株式会社
☎(0264)22-2228
